

豊橋市寺西1号墳の研究(1)

報告編

— 愛大史学 第32号 別冊 —

2023年3月

愛知大学文学部歴史地理学科

豊橋市寺西1号墳の研究 目次

第1章	はじめに (廣瀬憲雄)	(2)
第2章	古墳の立地と歴史的環境	
1	古墳の立地 (岩原 剛)	(3)
2	歴史的環境 (岩原)	(5)
第3章	調査の経緯と経過 (廣瀬)	(8)
第4章	墳丘と横穴式石室	
1	墳丘の構造 (岩原)	(10)
2	横穴式石室の構造 (岩原)	(12)
第5章	副葬品	
1	副葬品の概要 (岩原)	(18)
2	副葬品の出土位置 (岩原・深谷 淳)	(20)
3	象嵌装大刀 (初村武寛)	(30)
4	刀剣 (深谷)	(35)
5	鉄銚 (早野浩二)	(50)
6	鉄鏃 (岩原)	(53)
7	弓飾り金具 (岩原)	(62)
8	刀子 (岩原)	(63)
9	攝子 (岩原)	(64)
10	馬具 (大谷宏治)	(68)
11	乳脚文鏡 (岩本 崇)	(75)
12	須恵器 (大西 遼)	(77)

以上、本冊収録

以下、『豊橋市寺西1号墳の研究(2)』に収録

第6章 考察

- 1 象嵌文様からみた寺西1号墳出土大刀の評価(初村)
- 2 刀剣の評価(深谷)
- 3 鉄鉾の評価(早野)
- 4 鉄鏃の評価(岩原)
- 5 馬具の組合せと評価(大谷)
- 6 乳脚文鏡の評価(岩本)
- 7 須恵器の編年的な位置づけと器種構成の評価(大西)

第7章 特論

- 1 鉄製武器・馬具多量副葬古墳の意義(大谷)
- 2 東三河の後期古墳と寺西1号墳の位置づけ(岩原)
- 3 古代氏族と寺西1号墳(廣瀬)

第8章 総括(廣瀬)

引用・参考文献

豊橋市寺西 1 号墳の研究

寺西 1 号墳研究会

第 1 章 はじめに

本稿は、1965年に発掘調査された寺西 1 号墳の遺構・遺物等を報告し、関係する事柄について考察を加えたものである。寺西 1 号墳は、豊橋市石巻小野田町字寺西に存在した 6 世紀後葉の円墳であり、出土した遺構・遺物に関しては、発掘当初に歌川学による調査概報（歌川 1966）が発表されたが、その後本格的な紹介や検討はなされていない。そこで本稿では、未報告資料が多数を占める鉄製品を中心に、可能な限り実測図や写真を公開し、あわせてこれらの遺物等に考察を加えることで、寺西 1 号墳の調査報告とする。

本稿は、愛知大学総合郷土研究所が 2011 年度～2013 年度に実施した考古遺物の整理事業、2015 年度～2017 年度に実施した考古遺物の収蔵台帳作成事業、2019 年度～2021 年度に実施した鉄製品の保存処理・公開事業の成果を受け継ぐとともに、これらの事業と平行して、寺西 1 号墳研究会のメンバーが 2021 年度～2022 年度に実施した遺物等の調査成果に基づいている。執筆は、岩原剛（豊橋市文化財センター）・岩本崇（島根大学法文学部）・大西遼（愛知県陶磁美術館）・大谷宏治（静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課）・初村武寛（（公財）元興寺文化財研究所）・早野浩二（愛知県埋蔵文化財センター）・深谷淳（名古屋市教育委員会）および廣瀬憲雄（愛知大学文学部）が分担して行い、各部分の担当者は末尾に明示した。

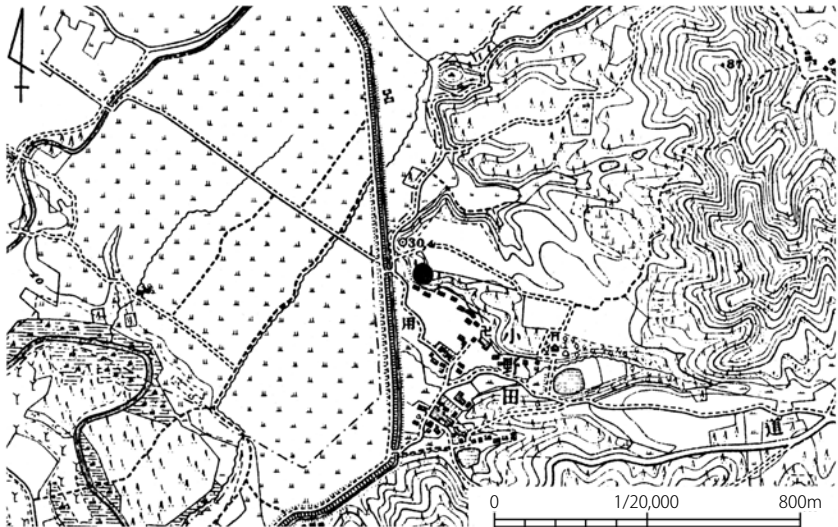
（廣瀬憲雄）

第2章 古墳の立地と歴史的環境

1 古墳の立地（第1～3図）

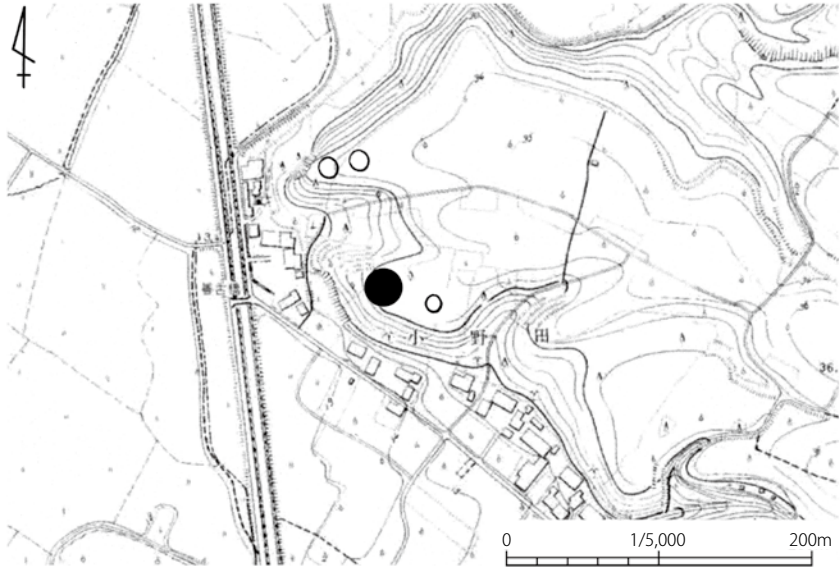
寺西1号墳は、西に沖積低地を臨む段丘の端部に築かれ、沖積地の中を一級河川の豊川が北から南に向けて貫流している。

豊川の中から下流域には河岸段丘が発達しており、大きく高位・中位・低位の3段に分けられる。寺西1号墳が所在するのは低位面で、豊橋市街地がある豊橋面やその北側の牛川面と一連の段丘である。一部に浅い谷が入っているが、段丘面上は概ね平坦で、寺西1号墳は開析谷に挟まれて西側に向け突き出した段丘の端部という好立地である。西側の沖積低地は圃場整備が行われる前には、条里地割が明瞭に残っていた（第3図1965年参照）。段丘上と沖積面との比高差は15～20mほどである。

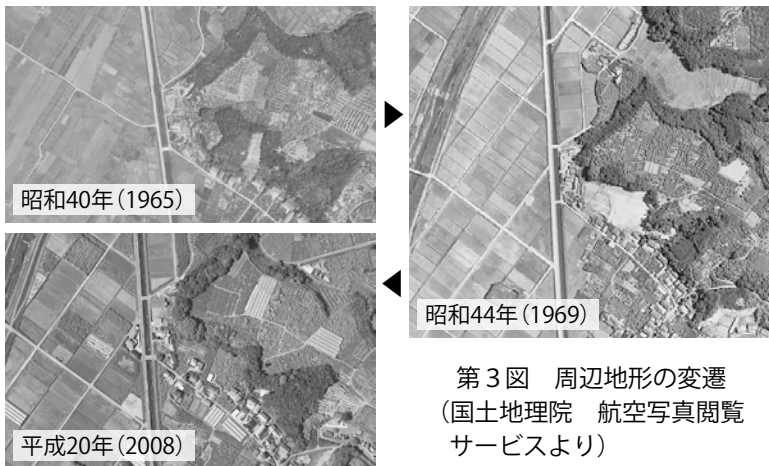


第1図 寺西1号墳の位置

なお、寺西1号墳の発掘調査は、間川改修工事の堤防築造用の土取り工事を原因にしている。古墳が所在する段丘端付近は削平され、後に畑地となった。削平から現状までの地形の変遷を第3図に示す。



第2図 寺西1号墳周辺の地形（「昭和35年豊橋市都市計画図」）



第3図 周辺地形の変遷
（国土地理院 航空写真閲覧サービスより）

2 歴史的環境（第4図）

寺西1号墳が所在する、豊橋市北部の古墳の様相を説明する。ここは北側は独立丘陵の吉祥山、東側は三河・遠江の国境である弓張山系、西側は豊川に囲まれた地域である。丘陵や段丘が発達し、豊川沿いに沖積低地が存在する。また古代から続く三河・遠江を結ぶ交通路（近世の「本坂道」）や豊橋市平野部と奥三河を結ぶ交通路（同「別所街道」）が通るところでもある。ここには500基ほどの古墳が存在する。

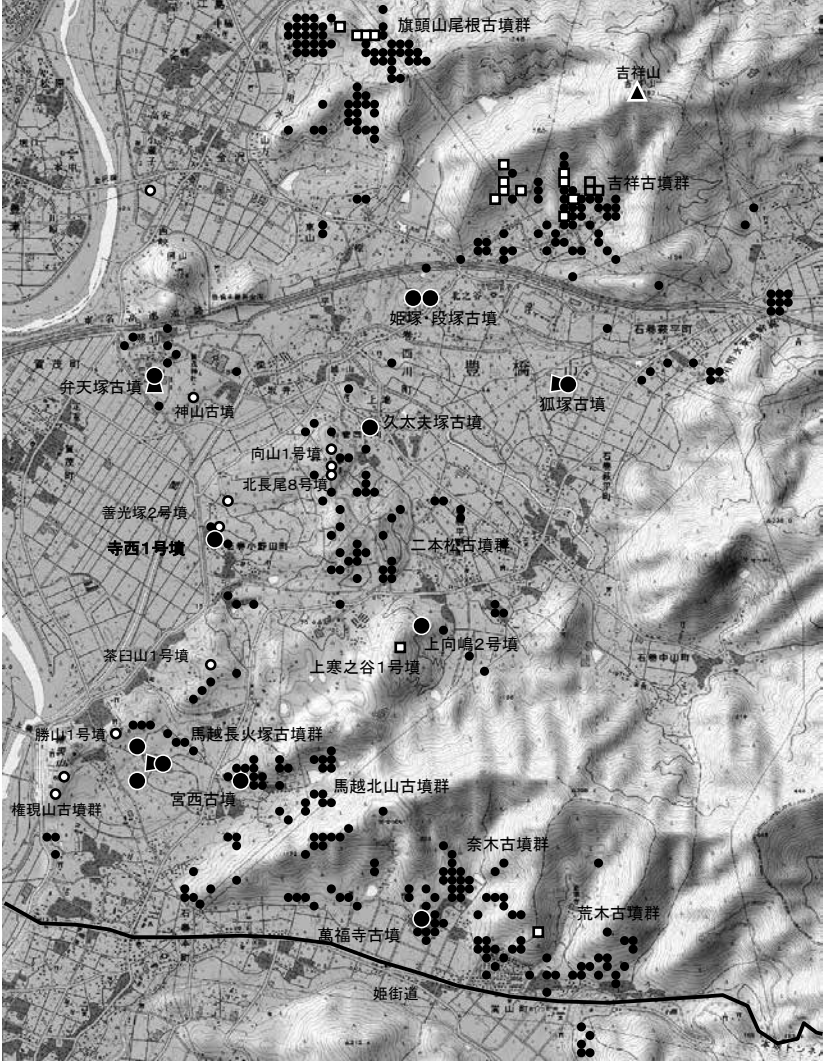
前期 豊橋市北部では、前期の早い段階から豊川や東三河平野部に臨む低丘陵上に首長墓が並んで築かれた。全長が30～50m程度の前方後方墳の勝山1号墳、茶臼山1号墳、北長尾8号墳、前方後円墳の権現山1・2号墳、向山1号墳（中期初頭）があり、墳形の違いや築造時期の重複から、豊川中流域を支配した複数の首長系譜の墓域と推定される。前期は豊川の上流・中流・下流に首長墓が築かれており、それぞれを本拠とする首長が流域を支配した。

中期 中期になると古墳は豊川右岸である豊川市域に、船山1号墳や滝平古墳群、念仏塚古墳群などの主要な古墳が築かれ、左岸の豊橋市域では首長墓は極めて少ない。豊橋市北部では寺西1号墳から谷を挟んだ同一の段丘上に築かれた善光塚2号墳があり、豊橋市域では数少ない円筒埴輪や須恵器（TK23型式）が出土している。また賀茂台地上にある神山古墳は、直径28mの円墳で中期古墳と考えられている。

後期 首長墓として、6世紀前葉に全長43メートルの前方後円墳・弁天塚古墳が賀茂台地に築かれると、前方後円墳が首長墓として継続する。6世紀中葉には全長34メートルの狐塚古墳、そして6世紀末葉から7世紀前葉にかけて、馬越長火塚古墳群が築かれた。

有力者の墓では鳥形装飾付須恵器が出土した萬福寺古墳、大型の横穴式石室を有する宮西古墳や久太夫塚古墳、金銅装毛彫文馬具が出土

した上向嶋2号墳などがある。独立立地のものと群集墳内に含まれるものがあり、有力者の墓には石室の形式や規模、墳丘の規模に差が見られ、階層の序列を認めることができる。



第4図 豊橋市北部の古墳の分布

一方群集墳は、丘陵上や山麓の緩斜面に盛んに築かれた。吉祥山には旗頭山尾根古墳群、吉祥古墳群などの密集型群集墳が存在し、中期から後期前葉の積石塚古墳から始まるところが特徴である。また国境越えの交通路沿いに奈木・荒木などの密集型群集墳が展開する。一方、二本松古墳群は独立丘陵上に展開する群集墳で、古墳の間隔が広く密集型とは言えない。二本松古墳群は、横穴式石室が無袖形のみからなる支群、擬似両袖形のみからなる支群など、支群単位で石室の形式が共通しており、集団の性質に石室の形式が対応する。このほか、積石塚古墳から始まる群集墳が吉祥山周辺に展開しており、東三河地方における積石塚古墳の中心的な場所である。中期末葉から後期初頭に地域開発・殖産興業を担う目的で招聘・移住した渡来人もしくは渡来系集団の墓域と目され、その統率者は弁天塚古墳や狐塚古墳など、吉祥山の南側にある首長墓の被葬者と考えられる。

豊橋市北部地域は、後期に東三河地方で最高の権力を持った首長墓の系譜を含む地域であり、首長に隷属する集団が群集墳を築いたこと、また有力者の墓に階層差が認められ、政治勢力が組織化されていたことなどがうかがえる（岩原2022）。

これら古墳を築いた人々の集落は、特定できていないのが現状である。第4図に示した範囲内に後期の集落がほとんど存在しないためである。本坂道から南の段丘上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が多数確認されており、ここを含む広域な集落の墓域であったと考えざるを得ないのが現状である。ただし近年、弁天塚古墳が所在する賀茂台地上の坂井遺跡において、6世紀代を主体とする多量の土師器が包含層から出土し、その出土状況から祭祀的な性質が伺われる。賀茂地区は、穂国造に比定される三河大伴直氏との関係が指摘される大伴神社が所在したところでもある（荒木2014）。

（岩原 剛）

第3章 調査の経緯と経過

1965年12月、寺西1号墳は建設省の河川改修に伴う土取りのため破壊されることになり、豊橋市教育委員会による緊急の発掘調査が行われた。調査は名古屋大学の大参義一が担当し、愛知大学の歌川学・古瀬吉秀と愛知大学文学部史学科学生を主体に、愛知学芸大学史学科学生や地元の有志を加え、12月2日から31日まで行われた。調査の結果、第4章以下で述べるように未盗掘の横穴式石室が検出され、多数の須恵器・土師器、鉄製品等が出土した。これらの遺物等は、歌川学による調査概報（歌川1966）で一部が紹介され、大参義一による報告（大参1970）もなされているが、歌川が愛知大学在任中に死去したこともあり、これまで詳細な紹介・検討はなされてこなかった。

その後、寺西1号墳の出土遺物は、豊橋市教育委員会と愛知大学総合郷土研究所が所蔵してきたが、このうち愛知大学総合郷土研究所が所蔵し、同研究所の旧建物（陸軍第15師団時代の将校集会所）で保管されてきた遺物の中には、相当量の鉄製品が未整理・未処理のまま残されていた。そこで総合郷土研究所では、2017年7月に寺西1号墳出土大刀の鏝2点から銀象嵌が発見された（荒木2018）ことを契機として、同年9月に鉄製品の一部の仮整理を（公財）元興寺文化財研究所に委託し、さらに2019年4月からは大刀のうち3本の保存処理も委託することで、鉄製品の整理と保存処理を進めた。その結果、保存処理を実施した大刀のうち1本の刀身から複数の銀象嵌が発見され（愛知大学総合郷土研究所2022）、寺西1号墳が6世紀後葉の東三河における重要な古墳であることが明らかとなった。

このうち、刀身に銀象嵌を有する大刀に関しては、2022年3月に愛知大学総合郷土研究所と豊橋市文化財センターが共同で報道発表を

行い、続いてシンポジウム「副葬品がかたる古墳文化—寺西1号墳シンポジウム—」を開催して報告したが、この段階では総合郷土研究所所蔵遺物の実測作業が十分ではなく、寺西1号墳全体の報告としては不十分なものに止まった。そのため、寺西1号墳研究会メンバーの協力を得て、2022年度にも引き続き調査・実測を進め、一連の成果を本稿で公表することとした次第である。

(廣瀬憲雄)

第4章 墳丘と横穴式石室

1 墳丘の構造（第5図）

墳丘の規模と概要

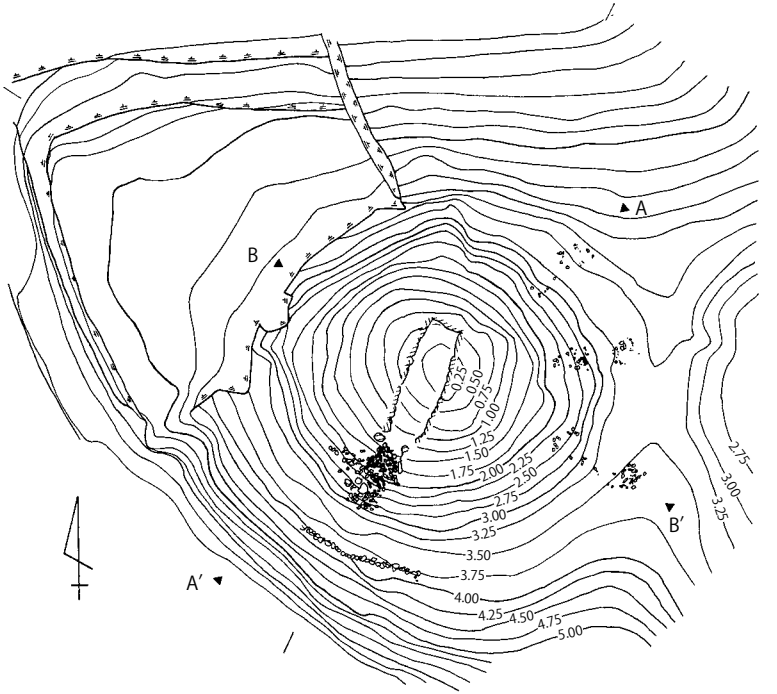
墳形 円墳（楕円形） **規模** 直径25m～30m、高さ4.0m

外部施設 石列・葺石。東側に墳丘区画のための溝

寺西1号墳は、東から西に向かって伸びた段丘の端部に位置し、西に沖積地を臨む。段丘の標高は30mほどで、沖積地との比高差は20mほどである。幅の狭い段丘端部に築かれている。

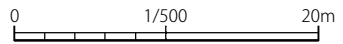
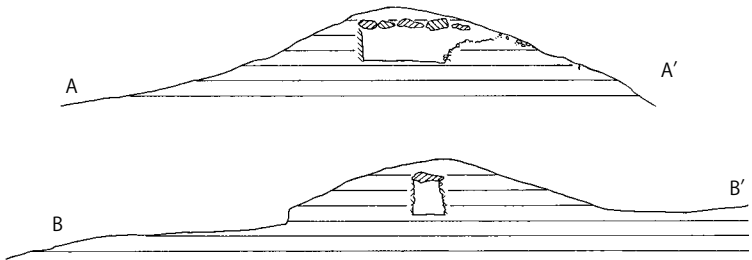
昭和40年の調査に際して作成された測量図（第5図）及び調査概要（以下、「旧報告」）から、墳丘は比較的整美な楕円形を呈しており、わずかに東西に長い楕円形を呈する。調査時にはすでに墳丘の西側は開墾のため一部削平されており、その墳端を把握することはできないが、後述する石列や墳端と目されるコンターライン（-375cm）の位置から、東西の規模は30mほどであったと考えられる。これは横穴式石室が墳丘の中心にあると仮定した場合、石室中央から東側の墳端を西に折り返した位置とも整合する。

墳丘の東側には、連続する段丘と墳丘を区別するための区画溝が設けられ、東西の幅は4mほどはあったと思われる。南北の長さは判然としないが、短くとも18m、長ければ28m以上あって、段丘上から段丘崖にかけて長く設けられていた可能性がある。また、削平された墳丘の西側は、本来は段丘面が続いたのち段丘崖の傾斜になったと考えられ、ここにも区画溝が存在した可能性が高い。墳丘の南側と北側は、墳丘から段丘崖へと斜面が移行し区画溝は見られない。



※高さは墳頂からの-m

▲：断面の位置



第5図 墳丘測量図

墳丘のトレンチ調査によって、外部施設として上下2段の葺石・石列が確認され、本古墳は2段築成であることが判明した。使用石材は文中では触れられていないが、旧報告の掲載写真を見る限り付近で産出されるチャートや輝緑岩が主体と思われる。測量図では、墳丘の東側と北側のトレンチ調査部分に散漫な葺石の分布が見られ、おおむね上下2段になることが分かる。一方、段丘崖が急傾斜となる墳丘南側は、上段こそ他と変わらない葺石であるが、下段は石材を2・3段積み上げた石垣状の石列になっており、地形に対応して施工方法を変えていることが分かる。

本古墳は幅の狭い段丘の端部いっばいに墳丘が築かれているため周溝は設けず、段丘崖へと移行する南側と北側を除いた、東側と恐らく西側に区画溝を設けて範囲を区画している。平面形はわずかに楕円形を呈した2段築成の精美な形状で、墳丘上には付近で産出される石材を用いた2段からなる葺石および石列が存在した。楕円形を呈した円墳で、直径は25～30m、高さ約4mを測る、東三河地方の後期古墳としては大型の古墳である。

2 横穴式石室の構造

概要（第6図）

寺西1号墳の横穴式石室は、測量図を見る限り墳丘の最も高いところからやや西側にずれた位置に存在するが、墳丘の中央に位置していたと言えるだろう。

石室は明確な羨道と玄室の区別を持たず、側壁が屈曲することなく一連となって奥壁から入口へと連なる「無袖形石室」である。ただし、入口に1対の立柱石を持つ特異な構造で、東三河地方の群集墳を構成する小型古墳に認められる、「羨門立柱」を有する無袖形石室で、首

長墳としては唯一の例である。

開口方向はS-20°-W、すなわち南南西である。平面形は、羨道部と玄室部とが一連となる胴張形である。

使用石材は、旧報告によれば付近で産出されるチャートと輝緑岩である。豊橋市北部地域では石灰岩が要所に使用される石室が多く認められるが、旧報告には石灰岩の記載は無い。

横穴式石室は残存状態が良好でほぼ完存している。発掘調査時には墳丘表面の直下から横穴式石室の天井石が北北東-南南西にむけて5枚並んで検出され、また天井石1枚が転落して発見されたので当初は6枚存在したことになる。残存状態は良いが、全体に東から西に傾き歪みが認められた。

以下、石室の各部位ごとに説明を進める。石室内の左右は奥壁から見ての位置である。なお、石室内の各部位は以下のとおりである。

石室全長 7.5 m

羨道部 長さ 2.0 m、幅 羨門 1.3 m・玄門部 2.1 m

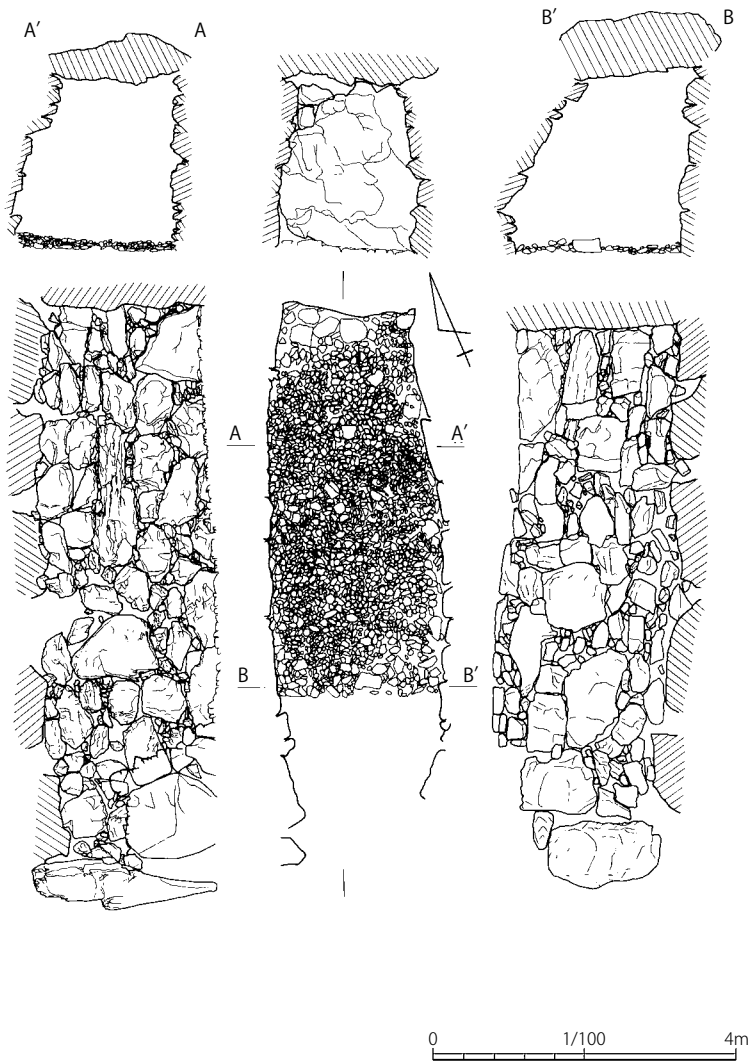
玄室部 長さ 5.5 m、幅 中央 2.3 m・奥壁前 1.75 m、
高さ 閉塞石端 2.2 m・中央 2.3 m・奥壁前 2.1 m

奥壁 幅 1.7 m、高さ 2.1 m

各部位の構造

前庭と羨門 石室の入口には1対の立柱石があり、東海地方の無袖形石室としては異質であるが、西三河地方より伝播した擬似両袖形石室の影響下で成立したものと見なされる。立柱石は右側壁で長さ2.5 m、左側壁で1.5 mを測る大型の石材である。また、立柱石の隣には左右側壁ともに大型の縦長石材を置いており、羨門をより重厚に見せる配慮がなされている。

なお、旧報告には前庭の記載は無いが、閉塞石の図には前庭側壁と



第6図 横穴式石室実測図（三河考古学談話会1994より引用）

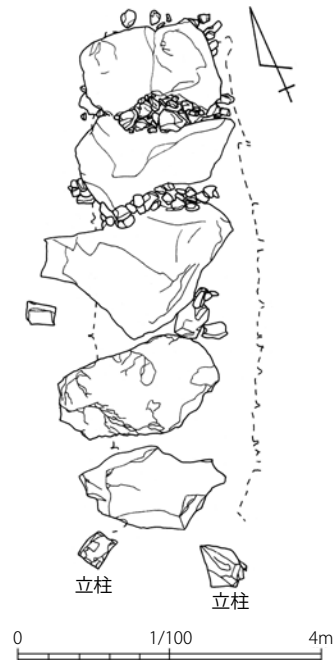
思しき大型石材が見られ、平面がハの字形に開いた前庭が存在したと思われる。確認できる長さは1.2mほどしかないが、墳丘測量図に示された閉塞石の分布範囲からすれば、2m以上はあったと推定される。であれば、横穴式石室の全長は10m近いものとなる。

天井石（第7図） 5枚が現存し、転落していた1枚と合わせ6枚が存在した。長さ2.1~2.8m、幅1.2~2.1m、厚さ65~95cmの扁平な大型石材を使用している。天井石の間隙には、上から小型の石材を充填していた。また、天井石の床面からの高さはほぼ一定の水平架構で、三河地方でよく見られるような縦断面形が弧状を呈することはない。

羨道部 側壁のこのほかの使用石材は、右側壁ではやや小型の石材が、左側壁では大型の石材が目立つ。側壁は玄室部と一連に構築されており、羨道部と玄室部とで特に違いは見られない。

ところで、左側壁は立柱石と隣接する縦長石材の下端が玄室部の床面よりも徐々に高くなっており、右側壁も立柱石の下端に空隙が見られる。これは羨道部の床面が、玄室部よりも高くなっていることを示す。後述する閉塞石の状況と合わせ、玄門部が段構造を呈すると理解され、竪穴系横口式石室の要素といえる。

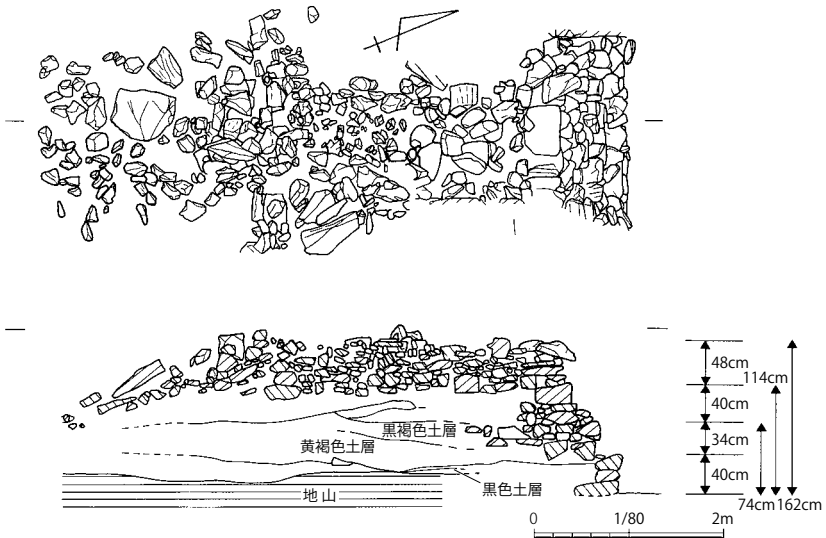
閉塞石（第8図） 閉塞石は、平面図を見ると玄室内側は整然とした石垣状を成しており、石室外へは雑然と積み上げたような印象を受ける。旧報告には「高さ1・(マ) 米



第7図 天井石実測図

に、約80度の傾斜に整然と積まれており、西側上半部に若干不整な、後に積みかえられたと思われる部分があった」と記述されるが、旧報告に掲載されなかった閉塞石内の土層断面図との解釈から、①床面より高さ40cmまで垂直に石材を積み上げ、②その上に外側へ少しずらして高さ34cmに石材を積み上げ、③さらにまたその上に外側へ少しずらして高さ40cmに石材を積み上げ、④最後に高さ48cmまで石材を置いていると理解される。

このうち①は地山面よりも低い位置から積まれているので、石室の掘方内に設けられているのは明らかで、確実に段構造を構成するものである。段の背後には石材は表現されず、掘方と段を構成する石材の間には土が充填されたことが分かる。また②・③も背後は石材ではなく土を置いており、それぞれの境界が土層の分層ラインに対応することから個別に施工されたことが分かる。一方、④はほぼ土を用いず、



第8図 閉塞石実測図・断面図

石材だけで構成されている。②～④は閉塞施設であったと解釈されるが、立柱石の下端の位置から見て②・③も段構造の一部として構築された可能性がある。従って段構造は、①のみであれば玄室部床面からの高さ40cm、②・③も含めれば高さ114cmになり、3段の階段状を呈する。なお、閉塞石全体の高さは162cmになる。

玄室部 側壁は全般に石材を横長に置いているが、右側壁は玄門部付近に長さ115cm、幅90cmほどの大型の石材を、ここだけ縦位に置いており、境界の目印にしたと考えられる。また右側壁は全体に横方向の目地がよく通り、石材の間隙には小型の石材が丁寧に充填されており、整然と積み上げられた印象を受ける。一方左側壁は右側壁に比べて大型の石材が目立つものの、これによって横方向の目地が通らない。左側壁の上部はほぼ小型石材で構成され、ここに玄室部から羨道部まで続く唯一の目地が認められる。前述するように、左側壁（東側壁）は西に向かって倒れ歪んでいるため、石材の間にも隙間が目立っている。両側壁の強度の違いは、構造の違いに起因するのだろう。

奥壁はチャートの1枚石で、いわゆる鏡石である。立柱とともに擬似両袖形石室の影響といえるだろう。扁平な石材を使用するが、チャートの性質上加工の痕跡は見出しにくい。

床面には一面に扁平な小型の石材を用いた敷石が存在し、厚さ10～15cmほど、石材を二重・三重に敷いていた。ほぼ隙間が無いほど緻密に敷いており、この上にさらに扁平な石材が散在していたが、これは遺体を安置した台石であろう。また奥壁前の、石室北西隅には長さ30cm前後の扁平な石材が集中している。

旧報告に石材に関する記載は無いが、掲載された写真から川原石である円礫が多く見られる。

(岩原 剛)

第5章 副葬品

1 副葬品の概要

寺西1号墳から出土した副葬品等の内訳は以下の通りである。

種類	名称	副葬品 確認点数		副葬品の総点数	
		愛知大学	豊橋市		
武器	大刀	象嵌装大刀 大刀・刀	2 9(8)	大刀 1 象嵌装大刀 大刀・刀 2 10(9)	
	小刀		1	1	
	剣			1	
	鉄鎌	頸部	229	頸部 5	234
		平根式46、尖根式165		平根式2、尖根式3	平根式22、尖根式199
	矛	三角穂式身 石突	3 1	石突 1	三角穂式身 3
	刀子	関部	11		11
弓飾り金具		8		8(弓2)	
馬具	轡	大型矩形立開環状 鏡板付轡	3	大型矩形立開 環状鏡板付轡 3	
	鍔	吊金具	2	2組	
	金銅装馬具	菱形帯金具	2		菱形帯金具 2
		半円方形帯金具	2		半円方形帯金具 2
		鞍 雲珠	1 1		鞍 1 雲珠 1
その他	乳脚文鏡		1	1	
	耳環		不明	1	
	鑷子	1		1	
須恵器	○石室内出土 提瓶 ○石室外出土 高坏・蓋坏・壺	1	提瓶 8 脚付鉢 1 甗 2 台付長頸瓶 1 壺 2 鳥鈕蓋付台付壺 1 壺付蓋付台付壺 1 甗石室外出土 高坏・蓋坏・壺	○石室内出土 提瓶 8 脚付鉢 1 甗 2 台付長頸瓶 1 壺 2 鳥鈕蓋付台付壺 1 壺付蓋付台付壺 1 甗石室外出土 高坏・蓋坏・壺	
土師器・埴輪			土師器高杯片 1 埴輪片(混入) 1	土師器高杯片 1 埴輪片(混入) 1	

寺西1号墳出土遺物は、主体を愛知大学（総合郷土研究所）が保管するほか、一部は豊橋市にも保管されている。豊橋市所蔵分は調査概報（歌川1966）に掲載された遺物が大半である。発掘調査費を豊橋市が負担した経緯から、豊橋市美術博物館での展示のため分置された可能性が高い。

このほか、旧報告には横穴式石室の南側、墳丘南側から出土したもののとして須恵器の坏身片及び高坏の脚端部片の実測図が掲載されるが、それに該当する遺物は現在所在不明である。

なお、本稿では時期を須恵器の陶器製品との並行関係で示している。当地方で認められる須恵器との並行関係は表1に示した。

（岩原 剛）

表1 須恵器の並行関係

実年代	猿投窯 (城ヶ谷2015)	陶器窯	湖西窯 (鈴木2001)
450	H-111	TK216	I 期前
	H-48	TK208	I 期中
500	城山2	TK23	I 期後
	H-11	TK47	
550	H-10	MT15	II 期
	H-61	TK10 MT85	III 期前
600	蝮ヶ池	TK43	III 期中
	H-44	TK209古	III 期後
		TK209新	III 期末
H-15	飛鳥 I		
650	I-101	飛鳥 II TK217中	IV 期前
	I-17	飛鳥 III TK217新	IV 期後
		飛鳥 IV TK46	
700	I-41	飛鳥 V	IV 期末
	C-2	平城 I	V 期前

↑ 寺西1号墳の築造時期

↑ 追葬

↓

2 副葬品の出土位置（第9～12図）

1965年の発掘調査における調査概報（以下「旧報告」）によれば、石室内の副葬品の出土状況は概略で以下の通りまとめられる。

- ①奥壁に接して東側壁に立てかけた大刀1振
- ②さらに奥壁に沿って須恵器群。東側壁から西に向かって壺付蓋付台付壺、脚付鉢、提瓶、広口壺、提瓶7点
- ③奥壁から20～30cm離れたおよそ中央に大刀7振、耳環1点
- ④奥壁から約3m離れた西側壁沿いに須恵器の甗と提瓶、さらにその付近には鉄鎌などの鉄器が多数塊状をなして存在
- ⑤（奥壁寄りの）東側壁に沿って刀子・鉄鎌・馬具を含む鉄器類
- ⑥奥壁から2.0～3.4m離れた東側壁に沿って、大刀2振、須恵器の台付長頸瓶、甗、鳥鈕蓋付台付壺。さらにその南側に壺
- ⑦奥壁から1m、中央から東へ35cmの位置に乳脚文鏡1面（床面から10cmほどの高さ）。その周辺に骨粉。点在する平坦な敷石を除いた下面にさらに床面があり、大腿骨4点を含む骨粉
- ⑧閉塞石から30cm離れた西側壁沿いに「小札」様の鉄器
- ⑨閉塞石の間から馬具

旧報告に掲載された副葬品の出土状況図は、平面的な位置を知る上では有効である。さらに残された出土状況図の原図と、旧報告の文章および掲載写真から、ある程度の遺物の出土位置と傾向を把握することができる。須恵器はすべての位置が明らかにできた一方、遺物取り上げ番号が失われた大刀や鉄鎌は制約が多い。

副葬品の出土位置には旧報告にもあるようにいくつかのまとまりが見受けられ、これは追葬時の副葬品の設置場所や片づけ状況を示すも

のと考えられる。以下では、旧報告に従いながらまとまりごとに出土状況を説明し、合わせて墳丘出土遺物についても触れる。

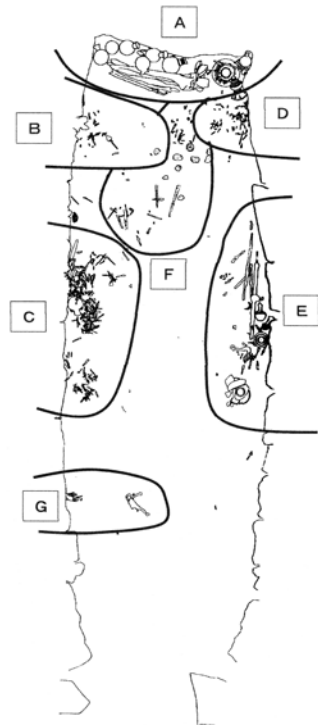
Aブロック

奥壁の前面に置かれた一群で、最古相を含む複数時期の須恵器が認められ、追葬時の片づけを経た副葬品群と考えられる。旧報告の①～③に該当する。ここではおもに須恵器群や大刀の集積が見られた。

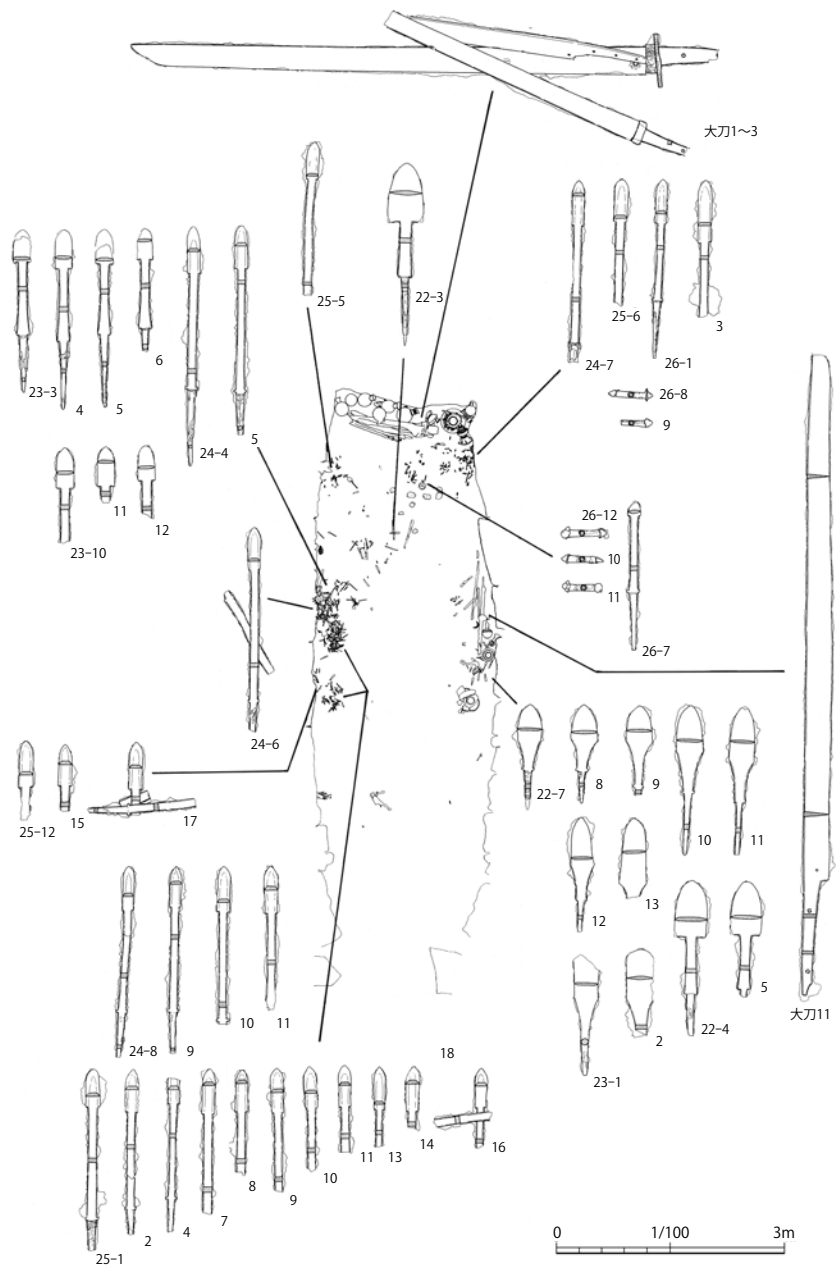
須恵器 須恵器群は、奥壁北東角に旧報告では触れられなかった提瓶(33-1)と大型の壺(36-3)が口縁部を上にして置かれ、壺の東側、東側壁との間の狭い空間に口縁部を上にして脚付鉢(35-2)が、壺の南側に倒れ掛かるようにして壺付蓋付台付壺(37-2)が、蓋がかぶせられた状態で置かれていた。壺の西側には奥壁に沿って7点の提瓶が存在し、このうち32-2が割れていた他はほぼ完存しており、口縁部を横にして倒れた状態であった。

大刀 奥壁北東角付近で東側壁に立てかけられていた大刀は、副葬品の出土状況図から1振と推測される。切先を上下のどちらに向けていたのかは不明である。奥壁からやや離れて、石室主軸に直交して集積されていた7振の大刀は、出土状況図の表現等から、多くのものが切先を西側壁に向けていたと推測される。

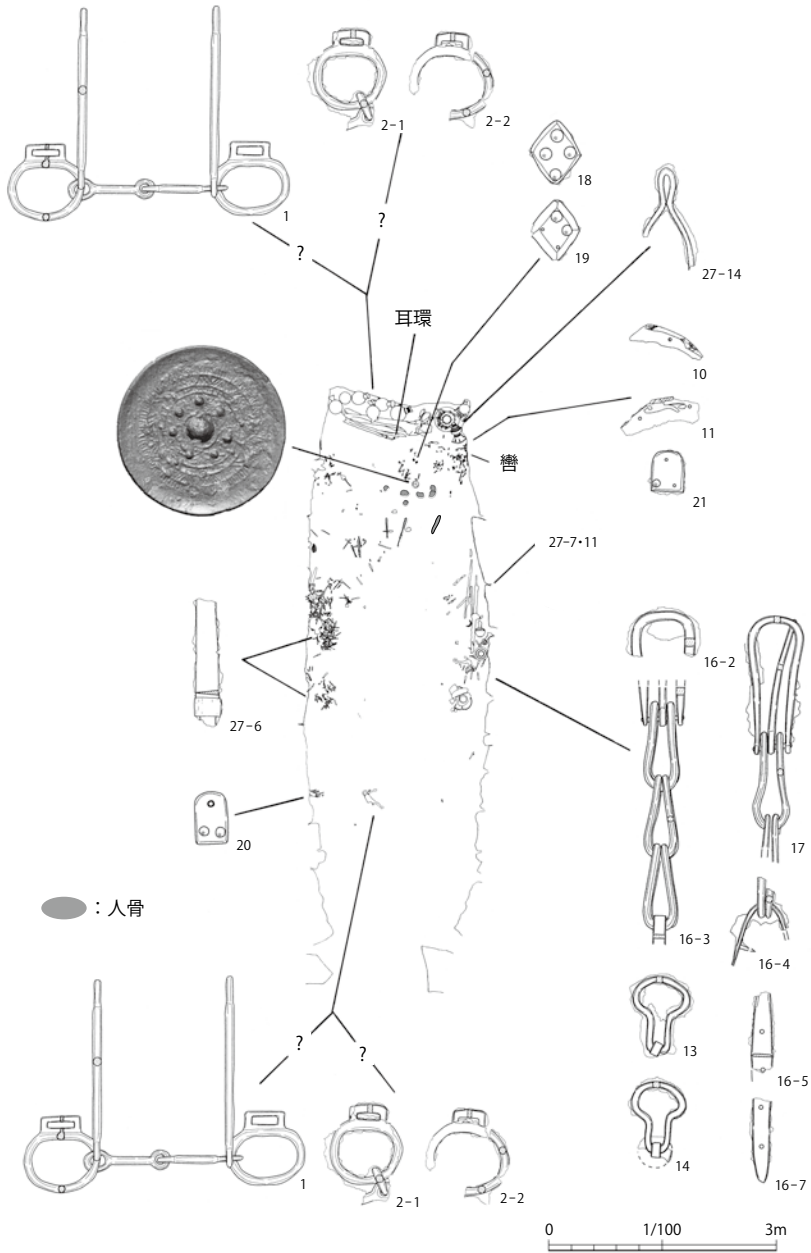
銚 旧報告には記されないが、壺(36-3)と提瓶(32-2)の間から鉄銚(取り上げ名：ホコ3)が出土した。銚は後述す



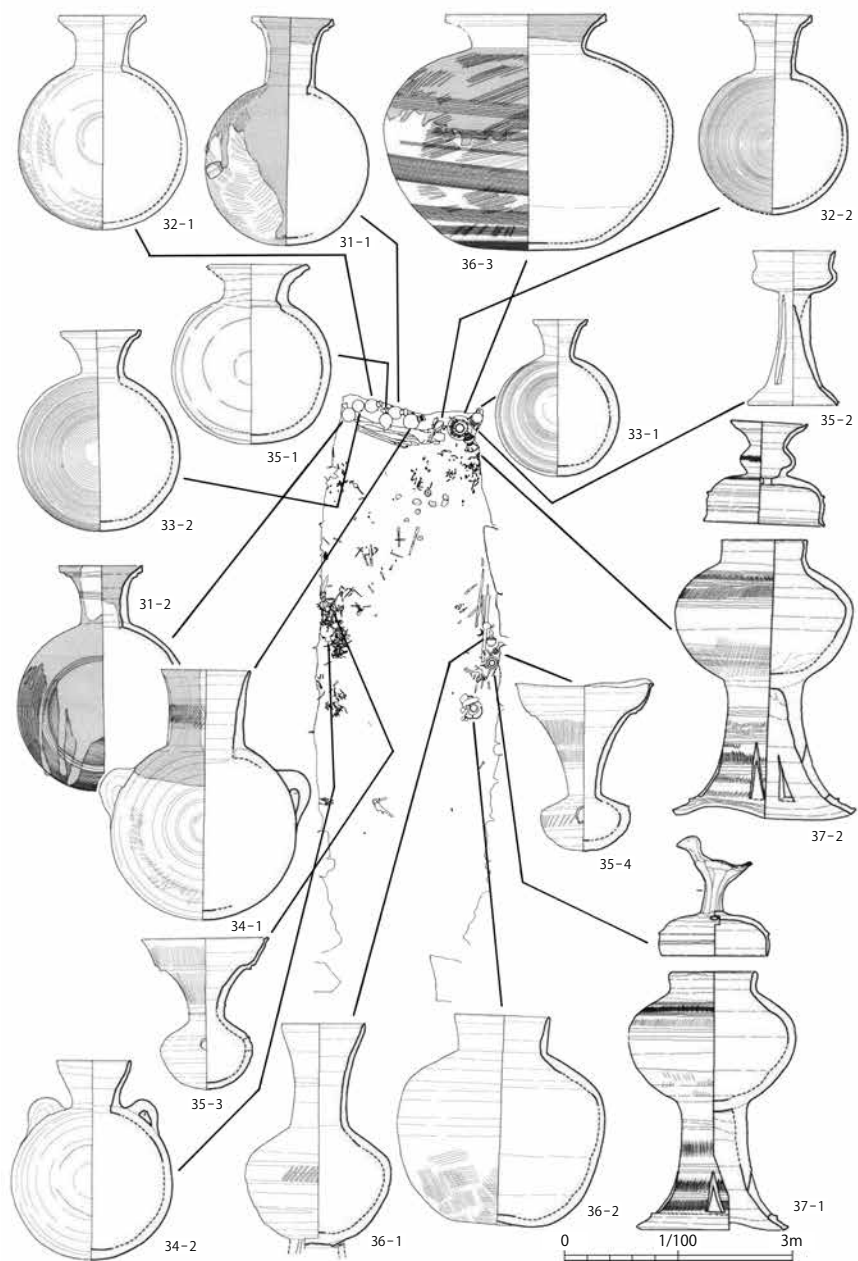
第9図 ブロックの位置と範囲



第10図 遺物出土状況図(1) 一大刀・鉄鏃・弓飾り金具一



第11図 遺物出土状況図(2) - 刀子・攝子・馬具・乳脚文鏡 -



第12図 遺物出土状況図(3) - 須恵器一

る石突の位置と合わせ、奥壁側に穂先を向け、石室主軸に沿うようにして置かれていたと推定され、後述する遺体の体側に置かれた可能性がある。

馬具 旧報告に説明は無いが、提瓶31-1と32-1の間から、床面の敷石に置かれて轡（取り上げ名：鉄器43）が1点出土している。出土状況図によれば引手を東側に向けまとめて置かれていた。

鑷子 旧報告に説明は無いが、出土状況図から奥壁北東角の、提瓶（33-1）の南側から出土したことが分かる。立てかけられた大刀に近接した位置でもある。

耳環 旧報告では耳環1点が出土したとされ、掲載された出土状況写真や残された出土状況図にも、大刀集積の南側付近に、小口を北側に向けた耳環が見受けられる。後述する大腿骨の位置から見て遺体の頭部が近いことを示唆する有益な遺物だが、現存しない。

Bブロック

奥壁から1mほど南側の、右側壁（奥壁から見て、以下同）から石室の中央付近にかけて、鉄鏃を中心とする鉄器が散在している。

鉄鏃 右側壁際に、尖根柳葉式鏃A類（25-5）が少量散在する。

弓飾り金具 右側壁際と、右側壁から1.2mほどの石室中央付近の2か所から弓飾り金具が出土した。弓の両端を装飾するものであれば、石室の主軸に直交して弓が置かれた可能性がある。出土が確認できるものはすべて、頭部の一部がつぶれて扁平な形状を呈したもの（26-8～11）である。弓の数は明らかにしづらいが、1張の可能性が高い。

Cブロック

旧報告の④に該当する。右側壁沿いの、奥壁から2.4～4.0mほどの範囲にかけて分布する副葬品群で、須恵器と鉄鏃群がある。

須恵器 奥壁から3.0mほどのところに、甕（35-3）を北側、提瓶（34-2）を南側にして並んで出土した。提瓶は口縁部を南側にして倒れていた。

鉄鏃 大量に出土している。現時点で正確な点数は分からないが、旧報告では100点以上としており、それは実測図を見ても首肯される。出土状況図を詳細に見ると、3・4か所の集中範囲が認められ、これが矢鏃の束としてのまとまりを示すと考えられる。先端の向きをすべて合わせているわけではない。出土位置が判明したのは、平根撫角三角形式D類（2-2）、平根柳葉式鏃（23-3～6・10～12）、尖根柳葉式B類（24-4～6・8～11、25-1・2・4・7～17）で、主体は大量の尖根柳葉式B類である。また平根柳葉式鏃はすべてここに置かれたと考えられる。

Dブロック

旧報告の⑤に該当する。鉄鏃群と馬具が出土している。

鉄鏃 尖根柳葉式B類（24-7）、同C類（26-1）、同E類（26-3）が確認でき、C・E類は尖根式鏃の中でも点数が少ない形状のものである。詳細に見ると、鉄鏃群は左側壁から30cmほど離れた小さな群と側壁際にやや散在傾向にある群とに区別され、両者とも尖根柳葉式鏃B類が確認されるなか、後者にC・E類が認められ、鏃群で性格が異なる。

弓飾り金具 2点の出土が確認できる（26-8・9）。頭部の片方が不整形で扁平な形状を呈するもので、類似した形状の出土位置が確認できないもの（26-13～15）もFブロックからこの付近で出土した可能性がある。であれば、Bブロックから出土したものを含めて、弓は2張存在したことになる。

馬具 奥壁から60cmほど南の左側壁際に轡と金銅装半円方形帯金具（21）が出土している。また、左側壁から石室中央へ1mほどの範囲

にかけて、金銅装菱形帯金具（18・19）と金銅装鞍の破片（10・11）が出土しており、馬装を構成する一具が付近に置かれたと考えられる。

Eブロック

旧報告の⑥に該当する。左側壁に沿って奥壁から2.0～4.0mの範囲に副葬品が存在する。須恵器群、大刀の集積、鉄鏃群、馬具があり、Aブロックに次ぐ主要な副葬品群である。

須恵器 奥壁から2.8mほどのところから南に、長頸瓶（36-1）・甗（35-4）・鳥鈕蓋付脚付短頸壺（37-1）の順に並べ置かれていた。長頸瓶と甗は横転しており、鳥鈕蓋付脚付短頸壺は旧報告の出土状況写真を見る限り、蓋は外されていたようである。またこれらから50cm程南側で、左側壁から若干離れて直口壺（36-2）が口縁部を上にして出土しており、土圧のためか破碎していた。

大刀 旧報告では2振出土したとするが、出土状況図にはそれ以外の細長い鉄器状の表現が見られる。残存状態の良好な東側の大刀11は、切先を南（入口方向）に向け、佩裏を表に向けて置かれていた。西側の大刀も同様に、切先を南に向けて置かれていたようである。

刀子 大刀集積の中から刀子が2点出土しており（27-7・11）、とくに27-7は大刀11の上に乗って出土したことから、刀装具の一部を構成していたと考えられる。またやや南に離れた位置からも刀子1点（27-8）が出土している。

鉄鏃 確認できるものはすべて平根式鏃で、特異な鏃群である。平根長三角形式と同撫角長三角形式A～D類が見られる。50cmほどの範囲内にやや散在して出土している。

馬具 大刀や鉄鏃などからなる、鉄器群の南端から鐙の兵庫鎖（16-2～4、17）と鍔金具（13・14）が出土した。Dブロックの金銅装鞍とは別個体の木製鞍が存在したのだろう。

Fブロック

旧報告の⑦に該当する。A・B・Dブロックに囲まれた石室中央付近一帯である。粉碎した人骨が分布するところで、被葬者の遺体が置かれた場所である。乳脚文鏡、石突、鉄鏃が出土している。これら副葬品は遺体に隣接して置かれたものであり、他の副葬品とは扱いが異なると思われる。

人骨 原形を留めるものは少ない。奥壁から南へ1m強ほどのところから、部位不明の粉碎人骨が分布する。ただし、遺物出土状況図によれば大腿骨と推定される部位が2本ずつ4本表現されており、これが葬送時の現位置を保っているなら、奥壁側に頭を向けた、北頭位の東西に並ぶ2体の遺体を推定することができる。また旧報告では、推定大腿骨が最終床面である「平坦な敷石」の下から検出されたとあり、出土状況図の原図には中央の推定大腿骨の東側に、さらに別の大腿骨らしき表現が劣化による粉碎骨の「骨粉」として記されている。

以上から、この付近に最低3体の遺体が置かれたと推定できる。ここでは便宜的に、中央西寄りの推定大腿骨付近を被葬者1、中央の推定大腿骨および粉碎骨を被葬者2、旧報告に未表現の、東寄りにある推定大腿骨付近を被葬者3と呼ぶ。

乳脚文鏡 奥壁から1mほど南側、中央から35cmほど東側において、鏡背を上にして床面から10cmほど浮いた状態で出土した。その位置から中央の被葬者2に伴う遺物であろう。

石突 下端が南側に向いた状態で出土した。Aブロックの銚に伴うものと考えられ、両者の間は60cmほど離れている。石室の主軸と同方向に置かれていることから、この銚は片づけの対象とはならない、被葬者2または3、恐らく乳脚文鏡とともに前者に伴う副葬品と考えられる。

鉄鏃 一帯に散漫に出土しており、他ブロックから混入したものもあるだろう。ただし、乳脚文鏡周辺から出土したものは尖根柳葉式E

類(26-3)や尖根三角形式(26-7)など、本古墳の大量の尖根式鏃にあって希少な形式のものである。また、床面のいずれに伴うかは明らかでは無いが、被葬者2の推定大腿骨から平根長三角形式B類(22-3)が1点のみ出土しており、鏃群の中で特別な扱いを受けている。

以上から、Fブロックの鉄鏃群は、被葬者の遺体の近くに置かれた象徴的な器物として、特殊な形式のものが選択されたと考えられる。

Gブロック

旧報告の⑧・⑨が該当する。石室の閉塞石近く、もしくは閉塞石の内部から出土した副葬品で、いずれも馬具である。

馬具 右側壁際の閉塞石の至近において、「小札様の鉄器」が出土したとされる。遺物の取り上げ番号が不明のため現物を特定しがたいが、2点出土している金銅装半円方形帯金具のうち、出土位置が不明確な20が該当すると思われる。また、閉塞石の間から轡1点が出土している。そもそも、閉塞石から馬具が出土するのは稀有な事象であり、追葬時に石室外への搬出を目的としたか、あるいは祭祀的な意図をもって置かれたのかは明らかにできない。出土状況を見る限り残存状態は良好であったと言えるが、これが1なのか、2-1・2なのかは不明である。

墳丘

旧報告によれば、石室内のほか墳丘南側の石列付近、つまり石室入口の前面から須恵器の坏身、土師器の甑の把手など、須恵器・土師器が出土したとする。愛知大学所蔵資料の中に含まれる須恵器の無蓋高坏の脚部(37-1・2)と土師器がこれに相当するのだろう。いずれも墓前祭祀に伴うか、あるいは搔き出しによる副葬品であろう。

(岩原剛・深谷淳)

3 象嵌装大刀（第13～15図）

象嵌装大刀 1（14-大刀1、15-1）

茎尻を欠くが、概ね完形に近い形状で遺存する鑢付大刀である。大刀には、鍔・鑢が装着された状態である。刃部および鍔内部に木質の遺存が確認できるため、鞘木・柄木が装着された状態であったことが確認できる。しかし、いずれの木質も遺存状況は良好ではないため、装具の細部の構造は不明である。

本大刀にみられる象嵌は、蛍光X線分析の結果、すべて銀であることが確認された。

刀身 刀身は、残存長93.6cmである。刃部長82.0cm、刃部最大幅4.5cm、茎残存長11.6cmである。切先はフクラ付である。鑄による膨らみが顕著である箇所が多く、本来の刃部厚がわかる箇所は限られるが、0.8cm程度とみられる。関部付近に鍔本孔が穿たれる。

関は片側の角関で、関部により刃部側から0.7cm程度減じる。茎には直径0.5cm程度の目釘孔が2箇所あるが、そのうち1箇所で茎が折損している。目釘孔には目釘は遺存していないが、鉄製の目釘が遺存していないところをみると、目釘は木製であった可能性が高い。

刀身には刃部中位の佩表・佩裏と、鍔本孔周辺の佩表・佩裏側の計4箇所に象嵌が認められる。

刃部中位の象嵌は、佩表側には「長い曲線と、背びれのような連続した短線を組み合わせた図像（全長9.3cm）」、佩裏側には「短い線を組み合わせたような図像（全長2.1cm）」である。

鍔本孔周辺の象嵌は、佩表・佩裏側ともに「花文（全長1.9cm×1.9cm程度）」であった。

鍔 全高1.7cm、最大幅4.5cm。現在は刀身が鑄で膨らんだ状態であるため、本来の形状からかなり広がってしまっている。本体は最大

厚2.7cm程度となるだろうか。

鍔は納刀時に鞘口を受ける機能をもつため、刃部側に向かってやや幅を減じる。また、刃部側には茎が通る孔が抜かれた蓋が取り付け。

鍔には側面全周および蓋に象嵌が認められる。

側面全周には、C字を組み合わせたような文様である。所々は渦巻状の文様もあるが、文様の構成は不明である。本来の図像からすると、かなり崩れたような文様である印象を受ける。背側で象嵌線が下地から浮き上がってしまっているため象嵌線を完全には表出できていない。

蓋には雲気文のような短い曲線がみえる。一部欠損している箇所があるため、文様の全体像は不明である。

鏝 倒卵形の八窓鏝である。長軸長9.0cm、短軸長7.7cm、最大厚0.7cmである。鏝の長軸に対して対称に、それぞれ4つの台形の透窓が配置される。鏝の端部形状は、厚みを持ち扁平となる。

鏝には、刃部側・茎側・耳部にそれぞれ象嵌が認められる。

刃部側・茎側の象嵌は、曲線ないしは直線で区画された内側にC字文を配する、「圏線C字文」象嵌である。窓間にみられるC字文は、鏝の刃部側のみ3つが配されるのに対し、他の箇所では2つを配する。

耳部の象嵌は、上下を直線で区画し、その内部にC字文を配する「圏線C字文」である。

象嵌装大刀2 (16-2)

刃部から茎までが遺存する鏝付大刀である。この大刀には、別の大刀の茎片と考えらえる破片および三角穂式鉄鋒が鏝着している。

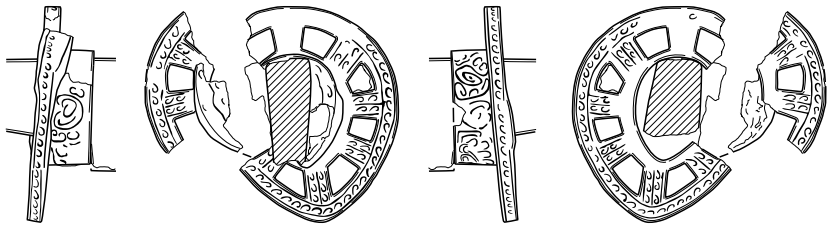
刀身は、刃部先端および茎尻を欠く。残存長17.6cm、最大幅3.7cm、最大厚7.5cm。関は片側の角関で、関部により刃部側から1.5cm程度減じる。茎には現状で目釘孔が確認できていない。

この大刀には、元々鏝が鏝着した状態で遺存していた。この鏝は倒

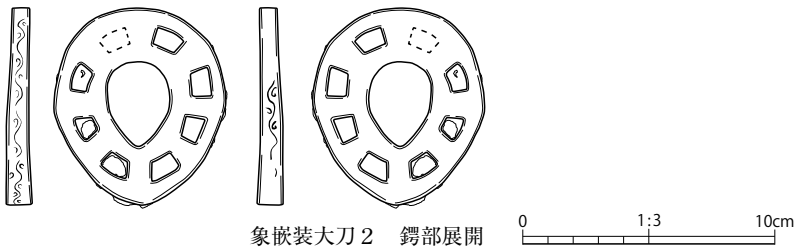
卵形の八窓鏝である。長軸長7.6cm、短軸長6.8cm、最大厚0.7cmである。鏝の長軸に対して対称に、それぞれ4つの台形の透窓が配置される。鏝の端部形状は、厚みを持ち扁平となる。

鏝には、耳部に象嵌が認められる。象嵌は、鏝耳部の全周に、波線とその上下にC字文を配する、「波状C字文」である。なお、鏝に見られた象嵌は、蛍光X線分析の結果、すべて銀であることが確認されている。

(初村武寛)

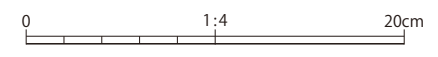
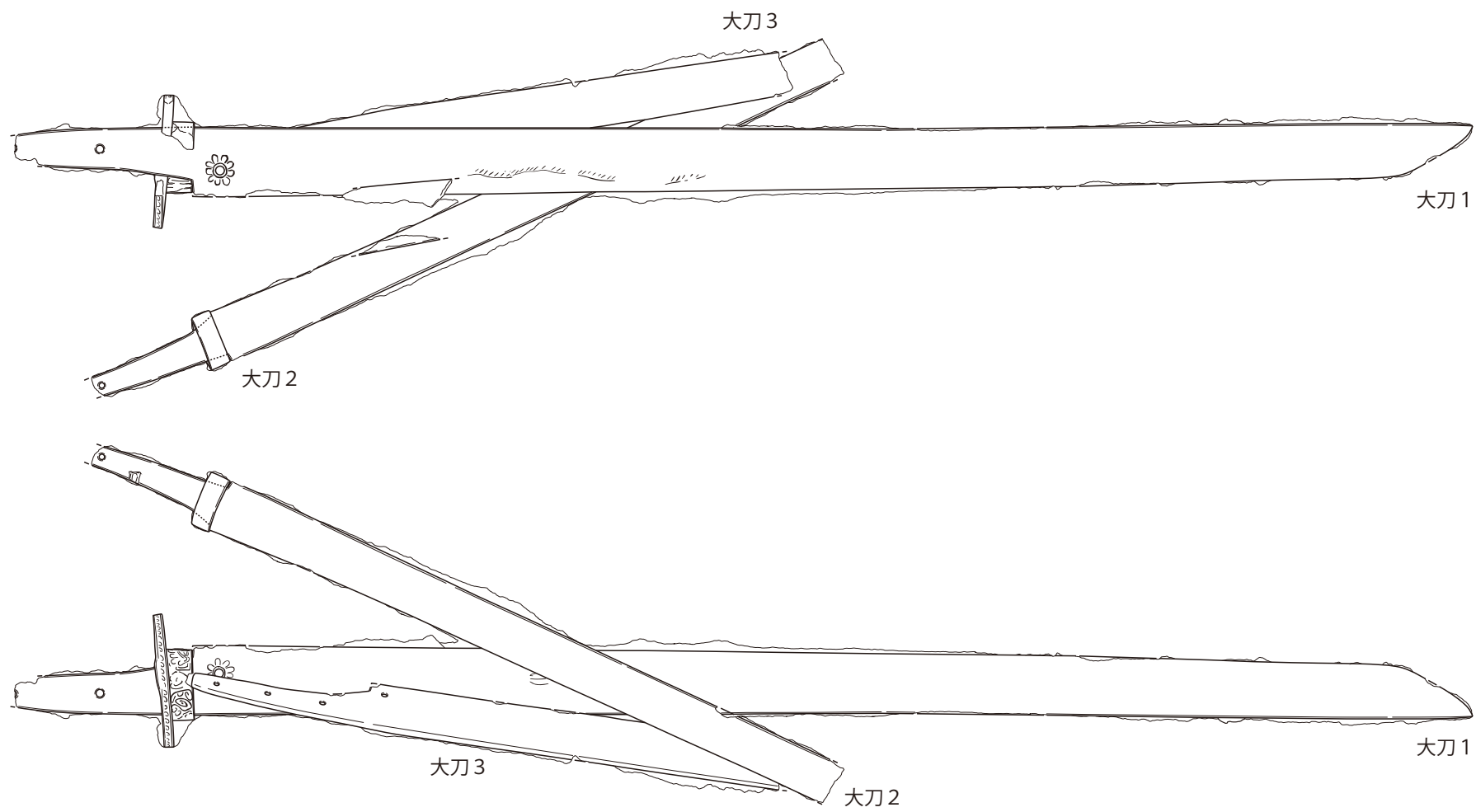


象嵌装大刀1 鏝・鏝部展開

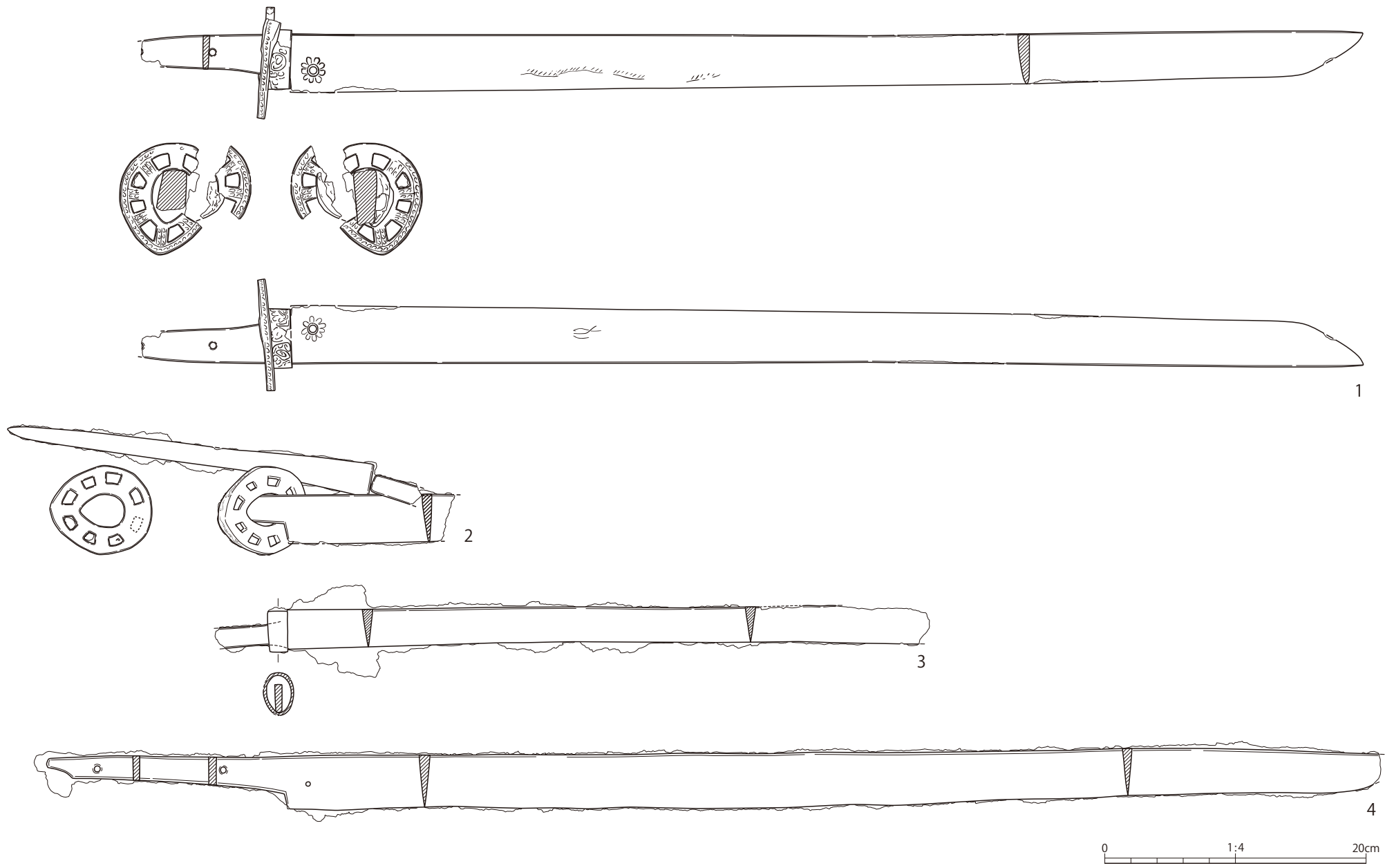


象嵌装大刀2 鏝部展開

第13図 象嵌装大刀1の鏝実測図



第 14 图 大刀实测图 (1)



第 15 图 大刀実測図 (2)

4 刀 剣（第14～20図）

先に報告された象嵌装の大刀（象嵌装大刀1・2）を除く、そのほかの刀剣について報告する。

寺西1号墳出土の刀剣のうち、象嵌装の大刀、大刀および刀、小刀、鏝、鉦が愛知大学、大刀、剣、鏝が豊橋市文化財センターに所蔵されている。

愛知大学所蔵の象嵌装大刀、大刀および刀、小刀、鏝は、平成29年度に公益財団法人元興寺文化財研究所により、遺物の接合関係、点数の確認などを目的とした整理作業が行われ（「寺西1号墳出土鉄製品整理作業報告書」）、各遺物に番号が付けられている（大刀1～10、大刀帰属不明1・3～6〈2は欠番〉、小刀1、鏝1～5）。大刀1が先に報告された象嵌装大刀1、大刀帰属不明3が同じく象嵌装大刀2に該当する。大刀および刀は、元興寺文化財研究所の整理作業の時点で、表層と芯に分離してしまっている状態のものが多くあった。整理作業においては、そうしたものについても、全形の復元のため、接合関係の確認が行われている。整理作業の結果、5本の大刀（大刀1～5）が錆着し、まとまった状態で出土していることが確認された。愛知大学所蔵の大刀等の報告にあたっては、「寺西1号墳出土鉄製品整理作業報告書」（以下、元興寺整理報告）の番号を踏襲し、象嵌装大刀の大刀1（象嵌装大刀1）、大刀帰属不明3（象嵌装大刀2）を除く、そのほかのものを報告する（大刀帰属不明5・6は実測対象外とした）。なお、元興寺整理報告で「大刀7」とされたものは、刀身長が確実に60cmに満たず、大刀ではなく刀とするのが適当であるため、「刀7」とする。

豊橋市文化財センター所蔵の大刀、鏝は、元興寺整理報告の番号に続く番号を付け、報告する（大刀11、鏝6～10）。

表2 刀剣一覧

名称	図番号	関の造り	茎尻の形状	鑢本孔	全長(cm)	刀身幅(cm)	残存部分	備考
大刀1 (象嵌装大刀1)	第14・15図	直角片関		あり	92.7	約4.3	切先～茎	刀身に銀象嵌、鉄地銀象嵌八咫罫 (面象嵌)、鉄地銀象嵌鑢
大刀2	第14図、16-1	不均等両関			残存長53	3.3～3.4	刀身～茎	鉄製鑢
大刀3	第14図、16-2	無角片関	一文字尻	あり	残存長38	3.3	刀身～茎尻	
大刀4	16-3	片関か			残存長73	3.9	刀身～茎	
大刀5	16-4				残存長38	3.3	切先～刀身	
大刀6	16-5～7	(両関か)			残存長30	2.8	刀身	(鉄製鑢)
刀7	16-8・9	均等両関	栗尻		49	3.1	完存	鉄製鑢
大刀8	16-10・11	無角片関			残存長74	3.4	切先～茎	
大刀9	15-3	両関			残存長54	3.0	刀身～茎	鉄製鑢
大刀10	16-12・13	片関か			残存長68	3.8	切先～刀身	
大刀11	15-4	斜角片関	隅扶尻	あり	残存長100	4.0	ほぼ完存	
大刀帰属不明1	16-14				残存長15.8	3.1	切先～刀身	大刀2もしくは大刀3の一部である可能性あり
大刀帰属不明3 (象嵌装大刀2)	15-2	斜角片関			残存長17.9	3.8	刀身～茎	鉄地銀象嵌八咫罫(耳象嵌)、大刀5の一部である可能性あり
大刀帰属不明4	16-15		隅扶尻		残存長11.3		茎～茎尻	大刀5もしくは大刀10の一部である可能性あり
小刀1	17-1	両関	一文字尻		残存長23	2.5	ほぼ完存	
劍	17-15	両関	栗尻		32.8	3.0	ほぼ完存	

以下、愛知大学所蔵のものと豊橋市文化財センター所蔵のものに分けて、各遺物について説明する。

愛知大学所蔵品

大刀2（第14図、16-1） 刀身から茎にかけて残存するが、茎尻は欠損する。残存長53cm。保存処理が施されており、現状、大刀1・3と錆着している刀身部分と、刀身から茎にかけての部分の二つに分かれている。16-1は後者の部分で、長さ31.5cm、刀身幅3.3～3.4cmである。鉄製の筒形の釧を伴う。関は、刃側が深い撫角、背側が浅い直角関の不均等両関である。釧は長さ1.1～1.3cm、長径3.5cm、短径2.8cmである。

大刀3（第14図、16-2） 刀身から茎にかけて残存する。残存長38cm。保存処理が施されており、現状、大刀1・2と錆着している刀身中程の部分と、刀身から茎にかけての部分の二つに分かれている。16-2は後者の部分で、長さ25cm、刀身幅3.3cmである。関は撫角片関、茎尻は一文字尻である。刀身根元のやや刃側寄りに釧本孔があげられている。茎の目釘孔の数は3個である。なお、刀身中程の部分の幅は3.1～3.2cmである。

大刀4（16-3） 表層と芯が分離し、全体的に劣化が著しい。元興寺整理報告では、茎から刀身中程までの長さ73cm分は1本の大刀として認識可能であったと報告されている。刀身中程の刀身幅は約3.3cm、関近くの刀身幅は約3.9cmである。現状、関の部分の確認が困難であるが、刀身幅からすると、片関と推測される。16-3は、大刀4が納められているテナ内において、大刀4の延長線上に位置する切先の破片で、大刀4のもの可能性がある。幅3.2cmで、切先の形状はフクラ切先である。

大刀5（16-4） 刀身が残存する。2片に分かれており、残存して

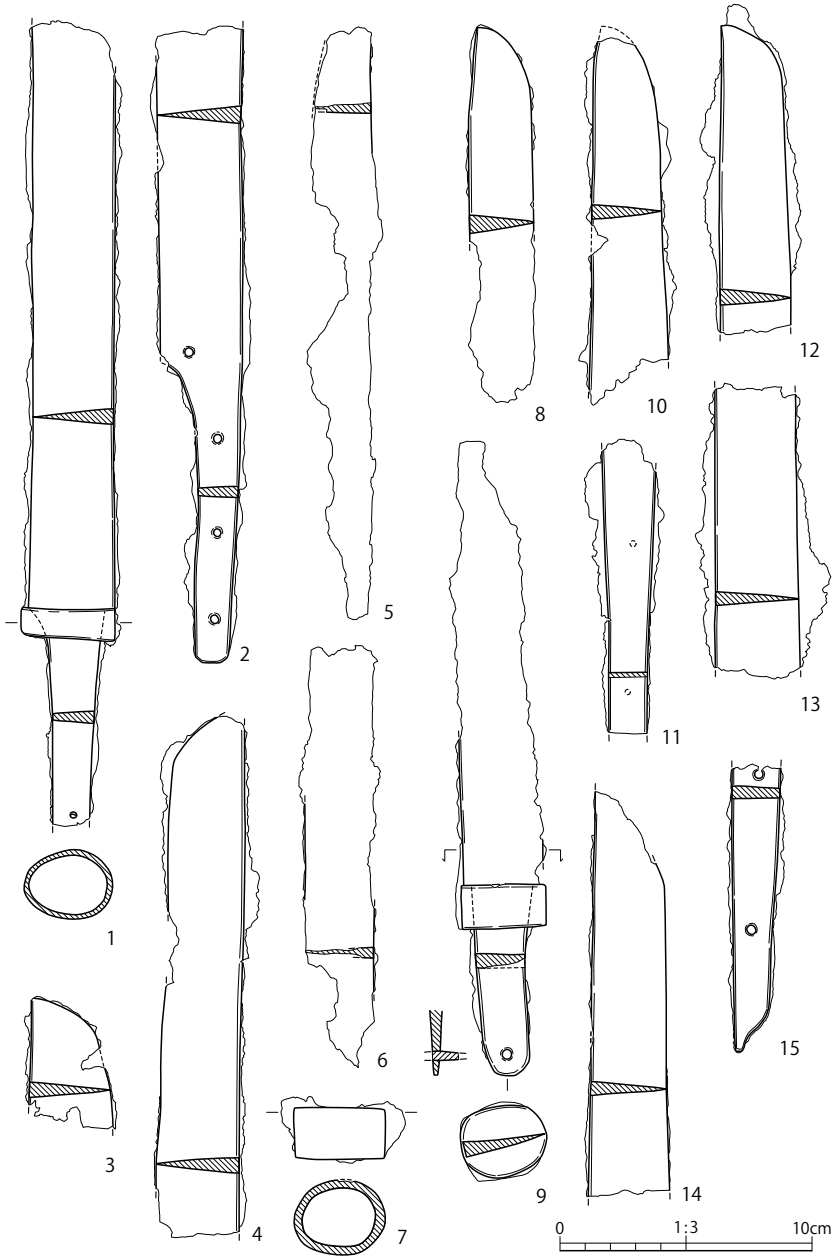
いる部分の全体の長さは38cmである。16-4は切先を含む破片で、残存長20.6cm、幅3.3cmである。切先の形状はフクラ切先である。

大刀6 (16-5~7) 刀身が確認できる。表層と芯が分離し、劣化が著しい。残存している部分の全体の長さは30cmである。16-5は切先に近い部分を含む刀身の破片で、残存長23.6cmである。16-6は刀身中程の破片で、残存長16.7cm、幅2.8cmである。16-7は大刀6に伴うとされる鉄製の筒形の鐮で、長さ1.9cm、長径3.35cm、短径2.8cm、厚さ約2mmである。内面に木質が付着する。刀身幅から、大刀ではなく、刀身長が60cmに満たない刀と思われる。

刀7 (16-8・9) 刀全体が残存する。刀身の大部分は表層と芯に分離して、複数の破片に分かれており、劣化が著しい。全長49cm。16-8は切先を含む刀身の破片で、残存長14.9cm、幅2.4cmである。16-9は刀身から茎にかけての破片で、残存長25.2cmである。鉄製で、蓋を有する鐮を伴い、関は均等両関である。茎尻は栗尻である。茎尻近くを目釘孔には、鉄製の目釘が残存する。関近くの刀身幅3.1cm、茎幅2.0cmである。鐮は長さ1.7cm、長径3.3cm、短径2.6cm、厚さ3mmである。

大刀8 (16-10・11) 刀身から茎にかけて残存する。大部分で表層と芯が分離しており、劣化が著しい。切先が若干欠損するとともに、茎尻が欠損する。関は撫角片関である。残存している部分の全体の長さは74cmである。16-10は切先を含む刀身の破片で、残存長14.4cm、幅3.0cmである。切先の形状は、フクラ切先と推測される。16-11は茎の破片で、残存長11.6cm、幅2.0cmである。図示はしていないが、関に近い部分の刀身幅は3.4cmである。

大刀9 (15-3) 複数の破片に分かれている。刀身から茎にかけて残存するが、切先、茎尻は欠損する。関は両関で、刃側は撫角、背側は角関と推定される。鉄製で筒形の鐮を伴う。残存長は54cm、刀身



第16図 大刀・刀実測図

幅は根元で3.0cm、茎幅は中程で1.5cmである。鋸は長さ1.5cm、長径3.2cm、短径2.3cmである。

大刀10 (16-12・13) 刀身が確認できる。表層と芯が分離している部分が多く、劣化が著しい。残存している部分の全体の長さは68cmである。16-12は切先を含む刀身の破片で、残存長13cm、幅2.9cmである。切先の形状はフクラ切先である。16-13は刀身の中程の破片で、残存長11.5cm、幅3.2cmである。16-13より関に近い部分は劣化が著しいが、刀身幅は3.8cmを測る。関の造りは、刀身幅からすると、片関と推測される。

大刀帰属不明1 (16-14) 刀身の切先側の破片で、切先がわずかに遺存する。残存長15.8cm、幅3.1cm。保存処理済み。

大刀帰属不明4 (16-15) 茎の破片である。茎尻の形状は隅抉尻である。目釘孔が二つ認められる。残存長11.3cm、幅1.8cmである。保存処理済み。

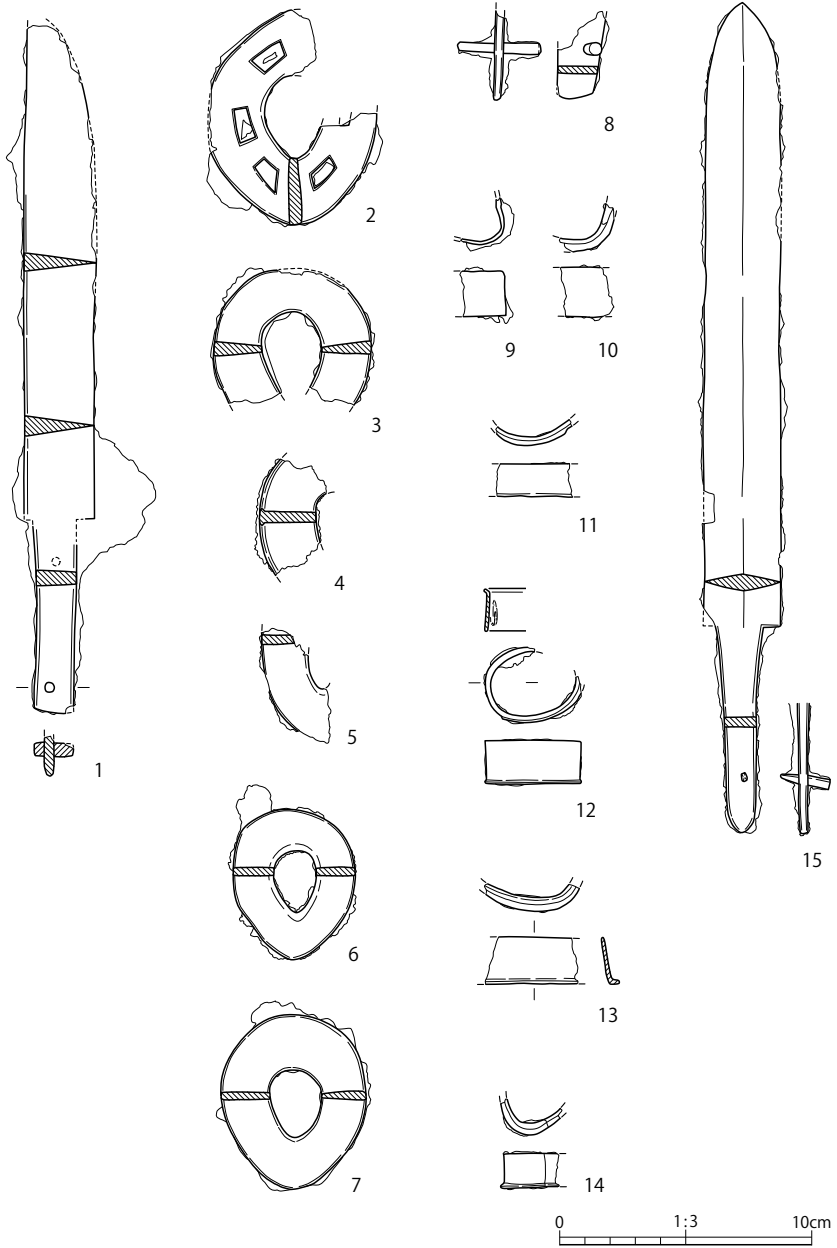
小刀1 (17-1) 切先が少し欠損するが、ほぼ全体が残存する。関は両関で、茎尻は一文字尻である。茎尻近くの目釘孔には、鉄製の目釘が遺存する。残存長約23cm、茎長7.7cm、刀身幅2.5cmである。

鏝1 (17-2) 鉄製の有窓鏝で、約1/4が欠損する。平面形は倒卵形を呈する。透かし孔の形は台形で、数は6個と推定される。長径8.2cm、短径約6.7cmと推定される。内孔の長径は3.2cmである。

鏝2 (17-3) 鉄製の無窓鏝で、約1/3が欠損する。短径は6.1cm、内孔の短径は2.3cmである。

鏝3 (17-4・5) 元興寺整理報告では2片をまとめて鏝3としているが、断面形が異なるため、別個体と考えられる。ここでは、17-4を鏝3-1、17-5を鏝3-2とする。鏝3-1 (17-4) は縁が肥厚し、縁部の断面形がT字形を呈する。

鏝4 (17-6) 鉄製の無窓鏝で、完形である。平面形は倒卵形で、



第17図 小刀・鏢・茎尻・鏃・劍尖測図

刃側がやや尖る。長径5.8cm、短径4.8cm、内孔の長径2.4cm、短径1.7cmである。鍔が接していた痕跡が確認でき、その大きさは長径3.2cm、短径2.2cmである。

鏝5 (17-7) 鉄製の無窓鏝で、完形である。平面形は倒卵形を呈する。長径6.7cm、短径5.6cm、内孔の長径2.6cm、短径2.0cm。鍔が接していた痕跡が確認でき、その大きさは長径3.3cm、短径2.8cmである。

その他 (17-8~14) 17-8は茎尻の破片である。茎尻の形状は一文字尻である。残存長3.4cm。長さ3.2cmの目釘が残存する。

17-9~11は鉄製の筒形の鏝で、元興寺文化財研究所の整理作業前には、大刀6、刀7、大刀2の破片、大刀帰属不明3の鏝と同じコンテナに納められていた。17-9と17-10は、もとは同じ個体の可能性が高く、長さ1.8~1.9cmである。内面に木質が付着する。17-11は長さ1.3cmで内面に木質が残る。

17-12と17-13は鉄製の筒形の鏝で、元興寺文化財研究所の整理作業前には、大刀10と同じコンテナに納められていた。17-12は長さ1.7cm、長径3.2cm、短径2.3cmである。17-13は長さ1.8~1.9cmである。

17-14は鉄製の筒形の鏝で、長さ1.3~1.4cmである。

豊橋市文化財センター所蔵品

大刀11 (15-4) 切先が少し欠損するが、ほぼ全体が残存する。保存処理済み。関は斜角片関、茎尻は隅抉尻である。刀身の根元近くのほぼ中央に鏝本孔があげられている。茎の目釘孔は2個確認できる。残存長1.0m、茎長17.2cm。刀身幅は根元で4.0cm、切先に近い部分で3.4cmである。

剣 (17-15) ほぼ完存する。保存処理済み。関の造りは直角両関である。茎は茎尻に向かってやや幅を狭め、茎尻は栗尻である。茎尻寄りの目釘孔には、鉄製の目釘が遺存する。全長32.8cm、剣身長

24.6cm、茎長8.1cm、剣身幅3.0cm、茎幅1.1～1.7cmである。

鏝6 (18-1) 鉄製の有窓鏝で、約1/3が欠損する。透かし孔の平面形は小さな台形で、数は6個と推定される。短径6.3cm、内孔の短径2.5cmである。

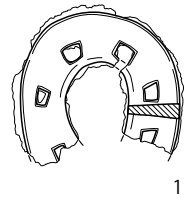
鏝7 (18-2) 鉄製の無窓鏝で、半分程度が欠損する。平面形は倒卵形と考えられる。縁が肥厚し、縁部の断面形状がT字形を呈する。鏝が接していた痕跡が確認できる。長径は8.4cmと推定される。縁部の断面形状、大きさから、愛知大学所蔵の鏝3-1 (17-4) と同じ個体の可能性が高い。

鏝8 (18-3) 鉄製の無窓鏝で、完形である。平面形は倒卵形で、刃側が尖る。長径8.4cm、短径7.0cm、内孔の長径3.9cm、短径2.8cmである。保存処理済み。

鏝9 (18-4) 鉄製の無窓鏝で、約1/4が欠損する。平面形は倒卵形で、刃側がやや尖る。長径9.4cm、内孔の長径4.2cmである。

鏝10 (18-5) 鉄製の無窓鏝で、約1/4が欠損する。平面形は倒卵形を呈する。鏝が接していた痕跡が確認できる。長径7.1cm、内孔の長径3.5cmである。

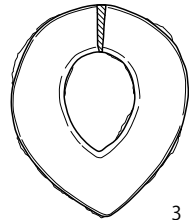
鉄刀の出土本数 歌川学氏の調査概報では、「二、発掘の経過」で、「奥壁に接して東側壁に立てかけた大刀」(歌川1966、p.7)、「奥壁よ



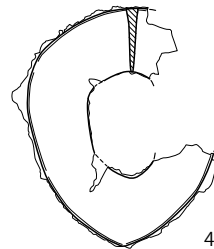
1



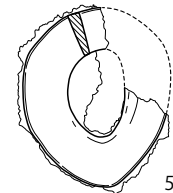
2



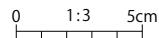
3



4



5



第18図 鏝実測図

り〇・二～〇・三米離れた略中央に直刀七」(歌川1966、p.7)、「奥壁より二米～三・四米離れた東の側壁にそって直刀二」(歌川1966、p.7)と記述されている。東側壁に立てかけられていた大刀の本数は、同概報の「石室内遺物配置図」をみると1本と思われ、鉄刀の合計本数は10本となる。一方で、同概報の「五、出土遺物」では、「大刀は全部で12発見された」と記述されており、数が一致しない。

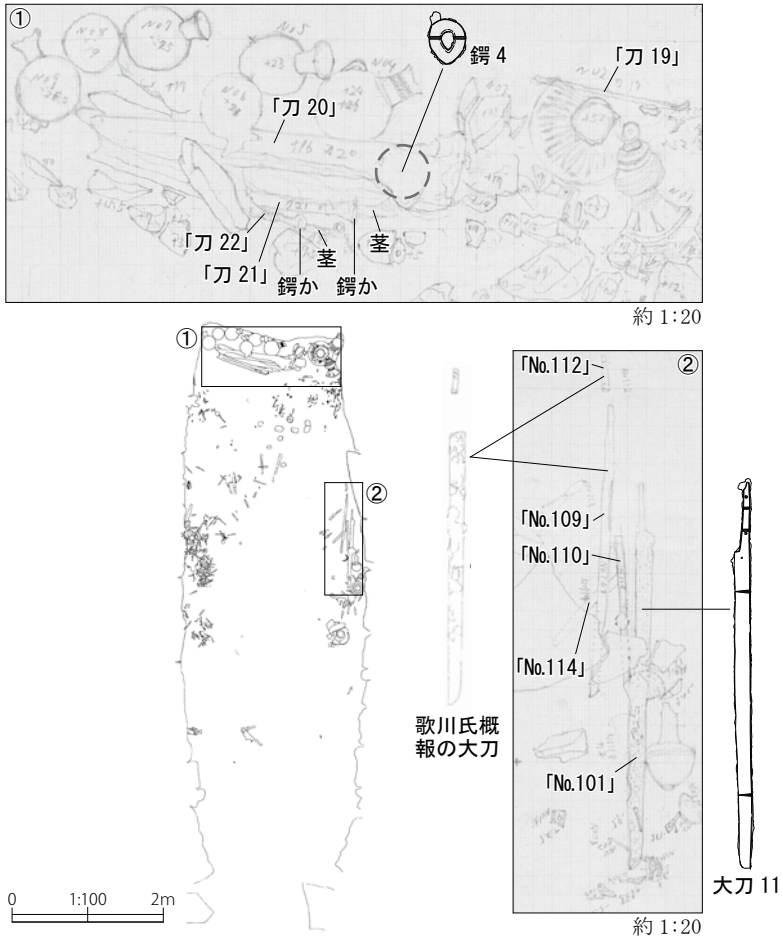
現在確認できる鉄刀の本数は、愛知大学所蔵品では確実に10本が認められ、豊橋市文化財センター所蔵品の1本と合わせ、計11本は確実である。そのほか、愛知大学所蔵品には、元興寺整理報告で大刀帰属不明として整理されたものがある。それら帰属不明のものは、法量等から、大刀帰属不明1が大刀2もしくは大刀3、大刀帰属不明3が大刀5、大刀帰属不明4が大刀5もしくは大刀10の一部の可能性がある。ただし、茎尻が欠損している大刀帰属不明3と、茎尻を含む大刀帰属不明4は接合関係がなく、大刀帰属不明3が大刀5の一部である場合、大刀帰属不明4は大刀5の一部ではないことになる。

鏝は、破片も含め13点が認められるが、鏝3-1(17-4)と鏝7(18-2)は同じ個体の可能性が高く、点数は12と考えられる。ただし、剣にも鏝が装着されていた可能性がある。

以上より、象嵌装の大刀を含め、鉄刀の出土本数は11もしくは12と考えておくのが穏当である。

各鉄刀の出土位置(第19図) 大刀1～5は錆着し、まとまった状態で出土していることから、奥壁近くで石室主軸に直交して出土した「直刀七」に含まれると判断できる。

愛知大学所蔵の遺物出土状況図の原図には、「刀20」、「刀21」、「刀22」の名称が記された鉄刀が描かれている。「刀20」は大刀1～5のまとまりを描いたものと思われ、「刀21」、「刀22」をそれぞれ1本の鉄刀とすると、合計で7本となり、歌川氏の概報の記述と数が一致する。



第19図 鉄刀の出土位置

「刀21」、「刀22」はともに切先を西（右側壁）に向け、鐔と思われる表現が確認できる。「刀21」と「刀22」を比べると、「刀22」は細身で、長さが短いことから、両関の鉄刀の可能性はある。幅広の「刀21」は片関の大刀と推測される。

大刀1～5について、元興寺文化財研究所の整理作業の結果、およ

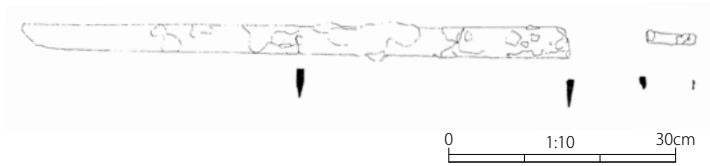
び整理作業前におけるコンテナ内の大刀の収納状況から、大刀1～4は切先をおおむね同じ方向に向け、大刀5はそれらとは逆方向に切先を向けていたと推測される。遺物出土状況図の原図における「刀20」の西端部分の表現からすると、「刀20」に含まれる大刀の多くが切先を西に向けていたと思われる。以上から、「刀20」に含まれる大刀1～4は切先を西に向けた状態で出土したと推測される。

ところで、現状で鉄刀から離れている鏢のうち、鏢4は、収納されていたビニール袋にあるマジックの注記から、石室のおおよそ主軸上の、奥壁から南へ30cmの位置で出土したことがわかる。この位置は「刀20」の東部分(大刀1～4の関が位置していたと推測される場所)にあたり、鏢4は大刀2～4のいずれかに装着されていたものの可能性がある。

「奥壁に接して東側壁に立てかけた大刀」は、遺物出土状況図の原図において、「刀19」の名称で描かれている。「刀19」は、具体的な大刀を推定する根拠となる情報がなく、個体の特定は困難である。また、切先を上下のいずれに向けていたのかは不明である。

歌川氏の概報で述べられている東側壁沿いの「直刀二」は、遺物出土状況図の原図にある「No.101」の大刀と、「No.112」と「No.109」で構成される大刀を指すと推測される。なお、両大刀の間に描かれている「No.110」と「No.114」は、図の表現から刀剣のようにもみえる。

「No.101」は切先を南（開口部側）に向け、佩裏を表側に向けて出土している。形状、法量から、「No.101」は大刀11の可能性が高い。「No.112」と「No.109」で構成される大刀は、歌川氏概報の「五、出土遺物」で詳細が述べられている大刀に該当する。刀身の部分と、茎尻を含む茎片に分かれていたこと、刀身は残存長72.2cm、幅3.5cm、茎片は残存長6.4cmを測ることが報告されている（第20図）。「No.101」（大刀11）と同様、切先を南（開口部側）に向け、佩表を表側に向けて出土



第20図 歌川氏概報掲載の大刀実測図（歌川1966より）

している。この大刀は、残存状況、茎尻の形状、刀身の長さなどから、大刀10の可能性が考えられるが、歌川氏概報の写真を見ると、切先にほとんど錆膨れがないのに対し、大刀10の切先（16-12）には錆膨れがある。

石室内の3か所に分かれて出土した11もしくは12本の鉄刀と、1本の剣は、複数回の埋葬に伴う副葬の結果、石室内に集まったものと判断するのが適当である。その点で、奥壁近くで石室主軸に直交して出土した7本の鉄刀、奥壁左隅付近で東側壁に立てかけられていた大刀は、石室内の片づけ行為により、二次的に動かされている可能性がある。

鉄刀と鏢の分類 象嵌装の大刀1（象嵌装大刀1）、大刀帰属不明3（象嵌装大刀2）を含め、寺西1号墳出土の鉄刀について、個々を区別する大きな要素の一つとなる法量から分類を試みる。長さが判明するものが限られるため、関近くの刀身幅に着目すると、4.0cm前後の幅広のものと、3.0～3.5cmのもの二つに分けられる。前者の幅広の大刀で、関の造りが明らかな大刀1・大刀帰属不明3・大刀11はすべて片関で、大刀4・大刀10も片関と推測される。大刀1・大刀11は鰭本孔を有する。それら幅広、片関の大刀は、ほぼ全体が残存する大刀11から、全長が1.0m程度のものであったと推測される。後者の刀身幅3.0～3.5cmのものには、片関で鰭本孔をもつ大刀3、不均等両関の大刀2、均等両関の刀7がある。大刀6は関の部分が残存し

ていないが、刀身幅から両関かと思われる。刀7の全長は49cmである。

鏝は、鉄地銀象嵌の八窓鏝2点、鉄製の六窓鏝2点、鉄製の無窓鏝8点に分けられる。鉄地銀象嵌八窓鏝の2点は、大刀1（象嵌装大刀1）のものが面象嵌鏝、大刀帰属不明3（象嵌装大刀2）のものが耳象嵌鏝である。鉄製六窓鏝の鏝1と鏝6は、ほぼ同じ大きさで、長径が約8.0cmと推測される。鉄製無窓鏝は大きさから、長径約9.5cmの鏝9、長径約8.5cmの鏝7・8、長径7.0cm前後の鏝5・10、長径約6.0cmの鏝4に分けられる。

鉄刀と鏝の年代観 寺西1号墳の鉄刀と鏝について、既往の研究成果に照らして、年代観を確認する。

前述したように、鉄刀の本数が11ないし12であるのに対し、鏝は12点が確認でき、全て、あるいはほぼ全ての鉄刀が鏝付きであったと考えられる。

寺西1号墳の鉄刀には、古墳時代を通じて連続的に変化してきた片関のものと、新しい形式である両関のものがある。白杵勲氏の編年(白杵1984a)に拠ると、大刀11が該当する片関隅抉尻、大刀3が該当する片関一文字尻はTK209型式期が存続期間の下限とされ、大刀2が該当する不均等両関の時期はTK43～TK209型式期、刀7が該当する均等両関の時期はTK209型式期以降とされる。

象嵌装の大刀1（象嵌装大刀1）に加え、大刀3・11が該当する鏝本孔を有する鉄刀は5世紀に出現し、MT85～TK43型式期に生産が最盛期を迎え、遅くともTK217型式期には製作が終了したと考えられている（齊藤2020a）。

2点の象嵌鏝について、まず大刀帰属不明3（象嵌装大刀2）の耳象嵌八窓鏝は、耳（側面）に波状C字状文の銀象嵌が施されている。大谷宏治氏は、波状C字状文象嵌鏝の大部分はTK209型式期以降に位置づけられるが、六窓鏝より古相の八窓鏝は、前時期のTK43型式

期に出現すると考えている(大谷2016)。次に、大刀1(象嵌装大刀1)の面象嵌八窓鏝は、平(表裏)の透かし孔間と周縁部、および耳に、波状C字状文より前に出現する圏線C字状文が施されている。平の象嵌文様の構成、および透かし孔を有することから、橋本博文氏による象嵌鏝の編年(橋本1993)の第三段階(6世紀第4四半期)に位置づけられる。平の文様構成は、橋本氏が第三段階の中でも古相とする群馬県高崎市岩鼻町出土の六窓鏝などに類似する。

鏝1と鏝6が該当する鉄製の六窓鏝は、八窓鏝にやや遅れて、6世紀末に出現するとされる(白杵1984b)。

鉄製の無窓鏝は、遅くともTK10型式期には出現し、TK43型式期から急速に普及する(白杵1984a、菊池2010)。静岡県出土の鉄製板鏝を対象とした西澤正晴氏の検討(西澤2002)を参照すると、全形がわかる鏝4・5・8は、TK43型式期からTK46型式期に存続する無窓鏝A類に該当すると思われる。西澤氏は、無窓鏝A類のうち、鏝4・5のような比較的小さなものは古い傾向(TK43~TK209型式期)を示すと述べている。また、西澤氏は、鏝9のような大型の無窓鏝はTK209型式期を中心に認められると指摘する。鏝3-1、鏝7の、縁部の断面形がT字形を呈する無窓鏝は、橋本英将氏が指摘した、金銅装頭椎大刀の鏝が、扁平なものから端部のみ断面T字形に肥厚するものへ変化すること(橋本2013)との関連を想定すると、TK209型式期以降に位置づけられる可能性がある。

寺西1号墳の11ないし12本の鉄刀は複数回の埋葬に伴うものと考えられるが、それらの年代は、多くがTK43型式期からTK209型式期の間位置づけられると判断する。ただし、刀7は、関の造りが新しい特徴をもち、追葬に伴うものの可能性がある。

(深谷 淳)

5 鉄鉾（第21図）

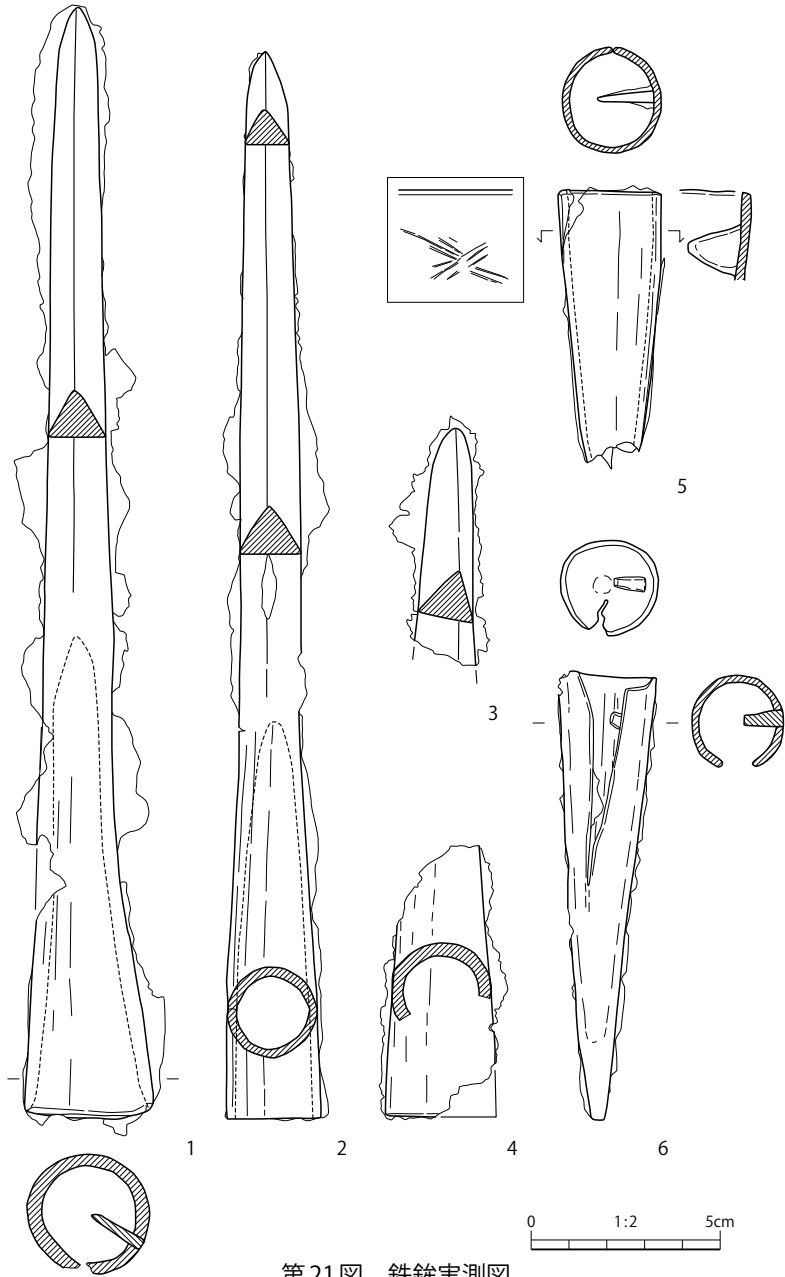
鉄鉾としては鉾身が2点（21-1・2）、鉾身の身部、袋部の一部（21-3・4）、石突2点（21-5・6）がある。鉾身（21-1～4）と石突1点（21-5）は愛知大学、石突1点（21-6）は豊橋市文化財センターが所蔵する。鉾身（21-1～3）はいずれも身部の断面が三角形の三角穂式、袋部（21-1・2・4）は断面が円形の「円筒袋式」、袋端部（21-1・2）は割り込みがない「直基式」である。

21-1は袋部の合わせ目が破断するが、鉾身のほぼ全体像が判明する。全長29.4cmで、関は明瞭ではない。袋の割りの深さは12.8cmで、袋端部から0.7cm内側に目釘（片釘目釘）がある。21-2は身部と保存処理済の象嵌装大刀2（鏢付大刀）に錆着した状態の袋部が接合する。

（接合した状態の）全長28.2cmで、関は明瞭ではない。袋の割りの深さは10.5cm程度で、合わせ目は断面で確認される。目釘は確認されない。21-3は鉾身の身部の一部で、残存長は6.2cmである。21-4は接合しない袋部の一部で残存長は7.2cmである。

21-5は鉾身の袋部である可能性もあるが、全体的な作りから石突とした。下端を欠損した状態で、残存長は7.3cmである。断面は円形である。上端から1.0cm内側に舌状の突起（目釘）がある。内面には柄木の木質が遺存し、糸状の繊維を格子状に巻き付け、その上に黒漆を塗布したことが確認される。6はほぼ全体像が判明する石突で全長12.0cm、断面は円形である。上端から1.0cm内側に目釘（片釘目釘）がある。上端に向かって開き気味の合わせ目がある。

鉄鉾でも特に三角穂式鉄鉾についての詳細な研究として、高田貫太、齊藤大輔による研究（高田1998・2001、齊藤2020b）がある。これら既往の研究においては、三角穂式鉄鉾の出現や普及（変遷や系譜）、形態と機能、装飾性、「階層性」を含めた存在形態等が検討されている。



第21図 鉄鉾実測図

それによると、三角穂式鉄鉾は古墳時代後期に出現し、一定の規格性（全長が20cmから30cm）が認められる点において前代の鉄鉾とは一線を画すとされる（高田1998・2001）。出現には朝鮮半島からの影響による可能性も示唆されるが、点数が少なく、現状において評価を確定させることは難しい。特に後期後半（TK43型式期）には27cm前後に集中するとされ（規格大量生産）、複数を副葬する事例も多い（齊藤2022b）。

寺西1号墳は3点の三角穂式鉄鉾を副葬し、複数を副葬する事例が多い後期後半の時期の傾向とも合致する。全長が判明する三角穂式鉄鉾2点（21-1・2）は一定の規格に合致するが、後期後半に多いとされるより規格性の高い一群と比較して全長が長い。これらの特徴から鉄鉾の時期はTK43型式期が想定される。その他、石突の内面に残る柄木に施された造作は、島根県上塩冶築山古墳の三角穂式鉄鉾の鉾身に遺存する柄木に認められる。

（早野浩二）

6 鉄鏃（第22～26図）

鉄鏃は、一部が豊橋市の管理下にあるが、大半は愛知大学総合郷土研究所が保管している。以下ではいずれの管理下であるかを問わず一括して説明し、管理の別は表3の観察表に示した。なお、豊橋市保管分は伝存の過程で出土位置の情報が失われている。

鉄鏃は平根式と尖根式の両者が認められ、後期の鏃群に通例で認められるように、少数の平根式と多数の尖根式とで構成される。点数は、鏃鉄鏃の点数内訳（形式が判明するもの）

平根式	長三角形式	6	48
	撫関長三角形式A・B	6	
	撫関長三角形式C・D	8	
	柳葉式	28	
尖根式	柳葉式A	43	168
	柳葉式B・C・D	96	
	柳葉式E	12	
	片刃箭式	16	
	三角形式	1	
計		216	

身部で平根式48点、尖根式168点
で、内訳は216点である。また頸部の点数は234点、茎の点数は226点を数え、鉄鏃の総数は最多となる234点を越えるものと思われる。これは東三河・東海地方のみならず、列島全体で見ても後期古墳出土事例としては屈指の点数である。

大量の鉄鏃が確認された本古墳であるが、十分な資料整理が行わ

れておらず、鉄鏃の接合はまったく行われていない。したがって今回掲載したものは残存状態が比較的良いものや鏃身部の形状が確認できたものに限られる。鉄鏃自体の残存状態は決して悪くは無く、茎に矢柄や茎巻の痕跡を残すものが多く認められる。

以下、各形式ごとにまとめて説明を進める。個別の法量等詳細は表3を参照されたい。

平根式鏃

平根式鏃には長三角形式、撫関長三角形式、柳葉式があり、それぞ

れの形態はさらに細別される。

長三角形式 (22-1~5) 鍬身部は長三角形を呈し、断面は平造りである。鍬身部の側縁が裾広がり形になり、頸部関が方形突起となるA類 (22-1) と、鍬身部の側縁が全体に弯曲し、頸部関は開き気味の角関となるB類 (22-2~5) がある。

撫関長三角形式 (22-6~23-2) 柳葉式、撫関柳葉式、圭頭鍬などにも分類される。鍬身部関が撫関となり、頸部との境界があいまいな形状で、中期の圭頭鍬の系譜上にある鍬である。本古墳における平根式鍬の主体となる。分量や形状からA~Dの4類に細分される。

A類 (22-6) は、鍬身部長2.2cm、同幅が1.55cmと極めて小ぶりなものである。B類 (22-7~9) は、A類よりも大きく鍬身部長は2.6~2.7cm、同幅は1.8~2.0cmである。頸部関は方形突起になる。22-9は他に比べ頸部が長い。C類はA・B類に比べて鍬身部がさらに細長く延びた形状で、鍬身部長3.3~3.9cm、同幅1.8~2.0cmを測り、頸部も長い。頸部関は方形突起あるいは角関である。D類は鍬身部がC類よりもさらに長い形状で、22-13は鍬身部長4.9cmを測る。また23-2は鍬身部長が3.1cmと短い、これは欠損したものを研ぎ直し再利用したものである。

柳葉式 (23-3~12) 鍬身部は小ぶりで頸部が細いため、尖根式とすべきかもしれないが、頸部が短いことから平根式に分類している。比較的まとまった数が出土している。鍬身部は側縁が直線状になり、切先はふくらが張っている。鍬身部の長さは2.3~3.0cm程度である。頸部は短く、関は台形となる角関 (23-3~6) と方形突起 (23-7~9) の両者が見られる。

尖根式鍬

尖根式鍬には柳葉式、片刃箭式、三角形式がある。このうち柳葉式

鍬は圧倒的に数が多く、出土鉄鍬の主体を占める形式である。ただし、形態はさらに細別される。片刃箭式と三角形式は数が極めて少ない。

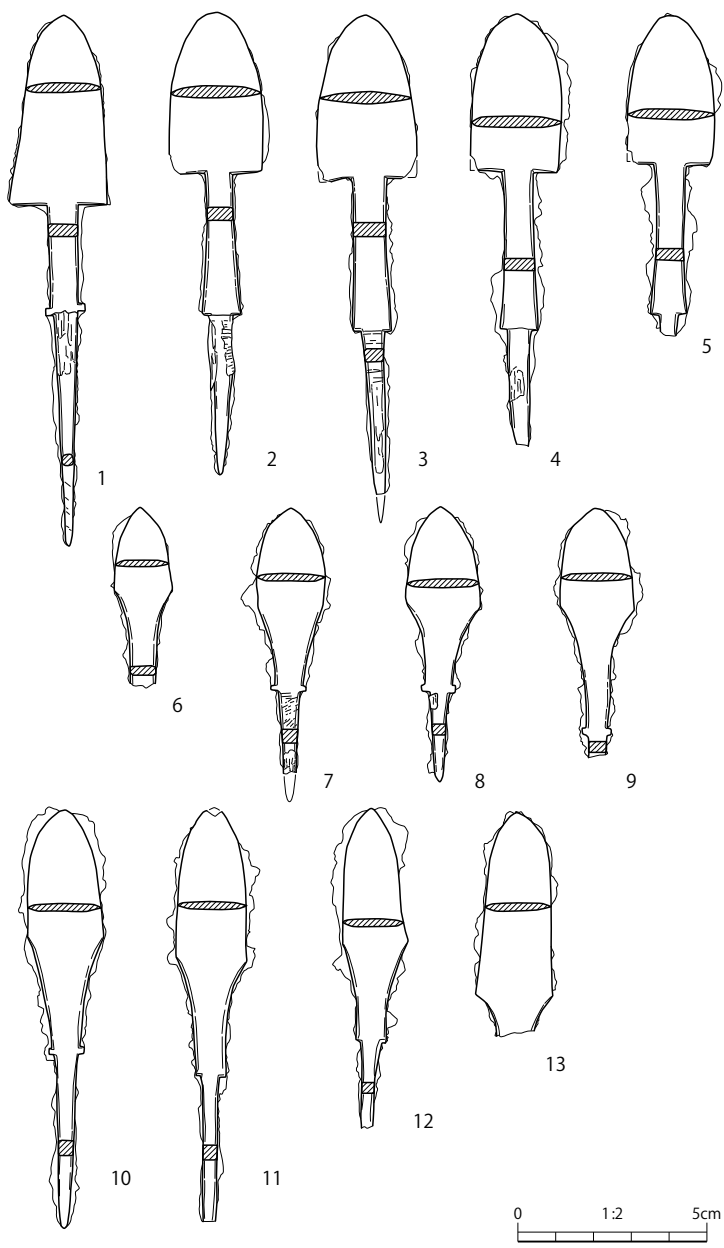
柳葉式 (24-1~26-7) 柳葉式の鍬身部に長い頸部が続く形態を基本とする。法量や形状からA~Eの5類に分類される。

A類 (24-1~3) は、鍬身部の側縁が直線的で断面は片丸造の一群である。柳葉鍬の汎列島的な傾向として、鍬身部の断面は片丸造から片切刃造へと変遷するが、A類は後述するB類に比べて華奢なつくりで、編年的にはより新しいものに位置づけられる。B類 (24-4~25-17) は鍬身部の側縁が直線的あるいはわずかに抉れて弯曲しており、鍬身部の断面は片切刃造であることを最大の特徴にする。頸部は長いものが多いが、長さは7~9cmとバラつきが見られ、B類の中でも更なる分類が可能と思われる。頸部関は方形突起である。鉄鍬の中でB類の出土数が最も多い。C類 (26-1) は、鍬身部の形状はB類と同じであるが、頸部が5.8cmと著しく短い。頸部関は方形突起である。明らかに確認できるのは1点のみである。D類 (26-2) も1点しか確認されていない。全長は18.3cmを測り、本古墳出土鉄鍬の中でも最長である。鍬身部は切先に近づくにつれ幅を大きく広げている。頸部関は方形突起である。E類 (26-3・4) は、幅広で著しく長い鍬身部を有するもので、26-4の特徴から頸部は短かったと思われる。頸部関は方形突起である。これも数は多くは無い。

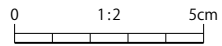
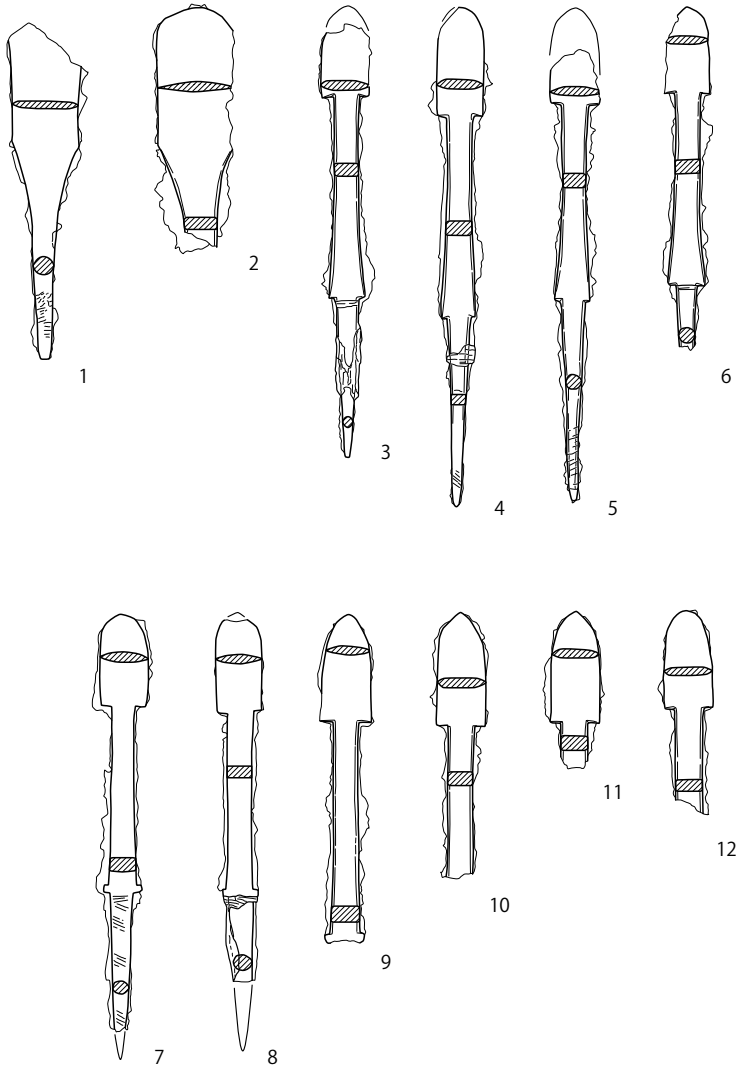
片刃箭式 (26-5・6) 鍬身部から頸部の破片が確認されるが、全形は不明である。いずれも鍬身部の断面形は平造である。鍬身部の形状が異なるため、さらに細分が可能である。

三角形式 (26-7) 鍬身部は小ぶりの三角形を呈し、断面は両丸造である。頸部は5.55cmと短い。1点しか確認されていない。

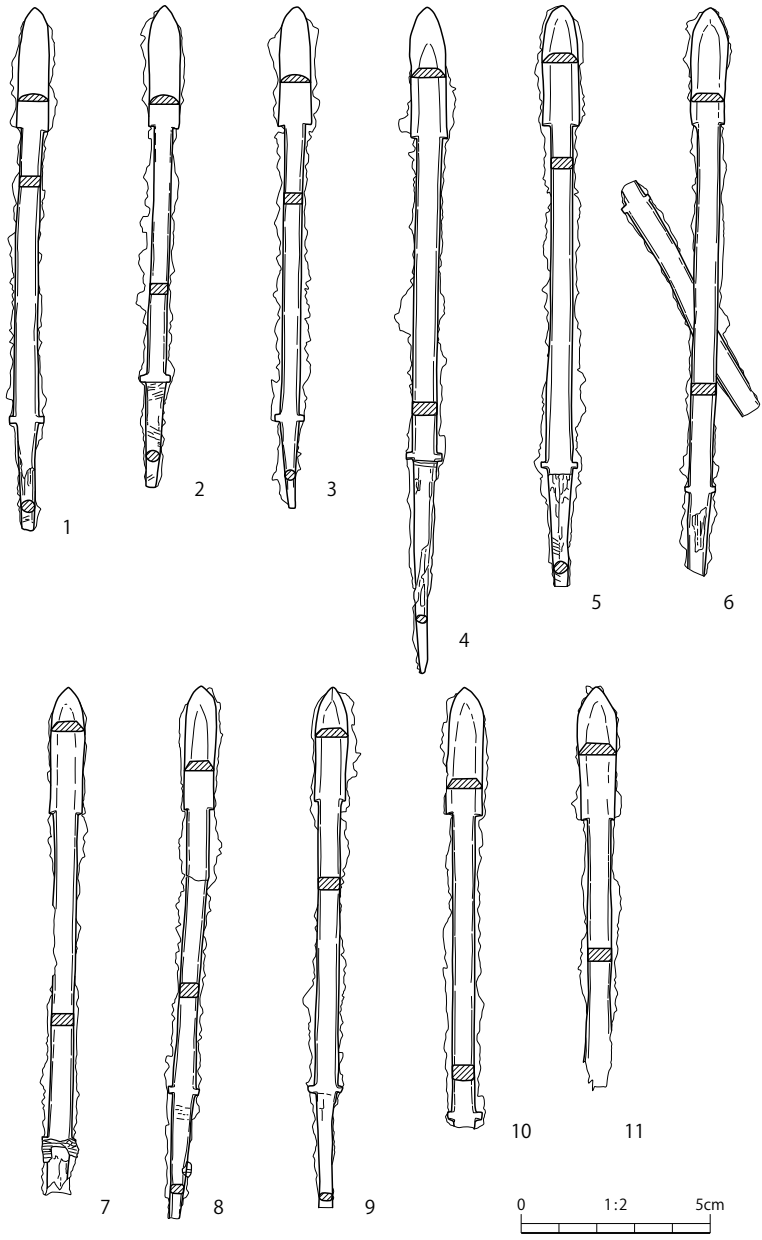
(岩原 剛)



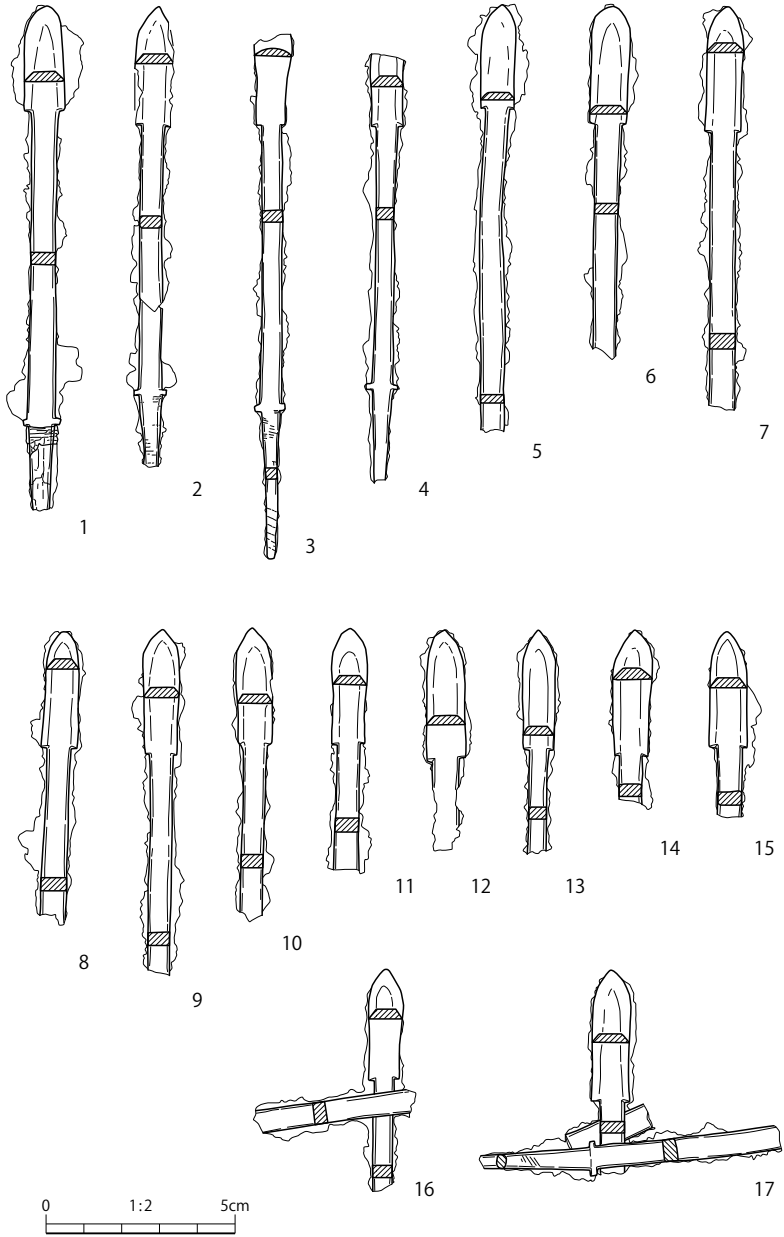
第22図 鉄鏃実測図（1）



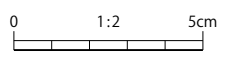
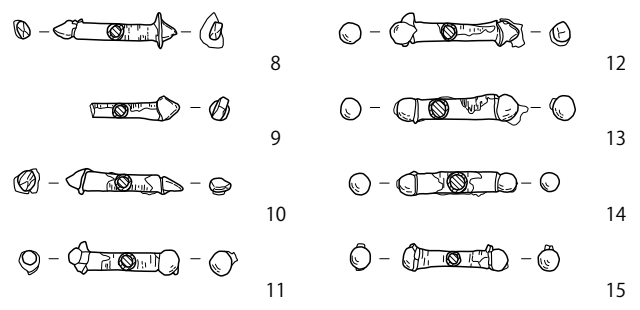
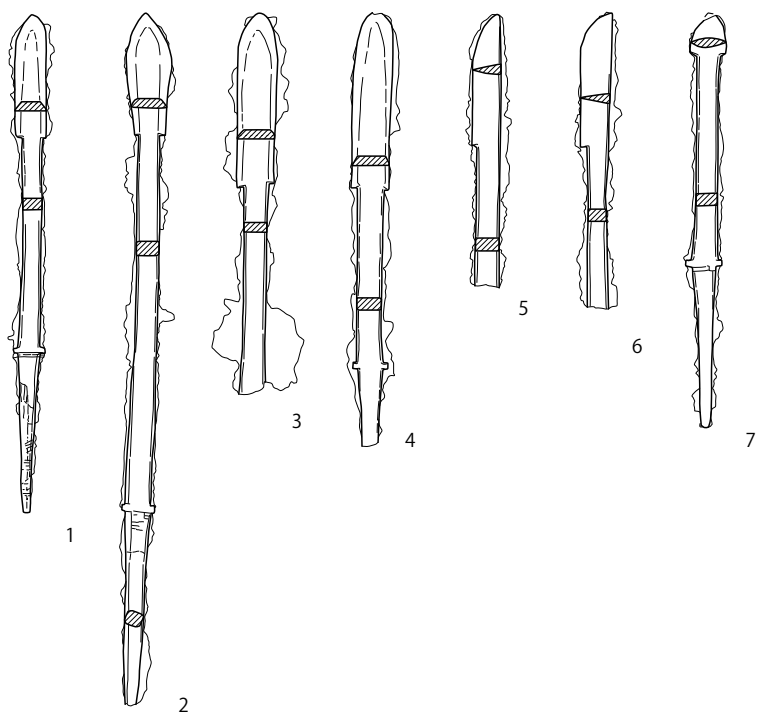
第23図 鉄鏃実測図(2)



第24図 鉄鏃実測図(3)



第25図 鉄鏃実測図(4)



第26図 鉄鏃・弓飾り金具実測図

表3 鉄鍬観察表

図番号	No.	大分類	小分類	出土 ブロック	全長	鍬身部			頸部			茎	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚		
22	1	平根式	長三角形A	-	14.00	5.00	2.55	0.20	2.90	0.70	0.30	6.10	豊橋市保管
	2	平根式	長三角形B	-	12.20	4.20	2.40	0.30	3.80	1.00	0.30	4.20	豊橋市保管
	3	平根式	長三角形B	F	(12.65)	4.40	2.60	0.35	4.10	0.80	0.40	4.35	大腿骨に重なり出土
	4	平根式	長三角形B	E	(11.40)	4.20	2.40	0.30	4.10	1.00	0.30	(3.10)	
	5	平根式	長三角形B	E	(8.50)	4.00	2.30	0.30	4.00	1.00	0.30	(0.50)	
	6	平根式	撫間長三角形A	E	(4.80)	2.20	1.55	0.20	(2.60)	0.70	0.20	-	
	7	平根式	撫間長三角形B	E	(7.00)	2.60	1.80	0.20	2.20	0.70	-	(2.20)	
	8	平根式	撫間長三角形B	E	7.20	2.70	2.00	0.25	2.10	0.75	-	2.40	
	9	平根式	撫間長三角形B	E	(6.50)	2.70	1.90	0.20	3.20	0.55	-	(0.60)	
	10	平根式	撫間長三角形C	E	11.00	3.30	2.00	0.20	3.20	0.70	-	4.50	
	11	平根式	撫間長三角形C	E	(10.80)	(3.90)	1.80	0.20	3.10	0.80	-	(3.80)	
	12	平根式	撫間長三角形C	E	(8.40)	3.50	1.80	0.20	2.60	0.80	-	(2.30)	
	13	平根式	撫間長三角形D	E	(5.90)	4.90	2.10	0.20	(1.00)	-	-	-	
23	1	平根式	撫間長三角形D	E	(8.90)	(3.20)	1.80	0.20	-	-	-	(5.70)	
	2	平根式	撫間長三角形D	C	(6.30)	3.10	2.00	0.30	(3.20)	0.80	0.30	-	
	3	平根式	柳葉式	C	(11.50)	(1.90)	1.20	0.25	5.30	0.95	0.35	4.30	
	4	平根式	柳葉式	C	13.20	2.90	1.20	0.25	5.30	0.70	0.40	5.00	
	5	平根式	柳葉式	C	(12.00)	(1.50)	1.30	0.25	5.20	0.60	0.40	5.30	
	6	平根式	柳葉式	C	(9.00)	2.30	1.20	0.25	5.00	0.65	0.40	(1.70)	
	7	平根式	柳葉式	-	(11.00)	2.40	1.30	0.30	4.95	0.65	0.35	(3.65)	豊橋市保管
	8	平根式	柳葉式	-	(9.50)	(2.45)	1.15	0.25	4.80	0.60	0.30	(2.25)	豊橋市保管
	9	平根式	柳葉式	-	(8.70)	2.85	1.40	0.20	5.85	0.70	0.40	-	豊橋市保管
	10	平根式	柳葉式	C	(7.00)	3.00	1.30	0.30	(4.00)	0.65	0.30	-	
	11	平根式	柳葉式	C	(4.20)	3.00	1.30	0.30	(1.20)	0.65	0.40	-	
	12	平根式	柳葉式	C	(5.40)	2.60	1.30	0.20	(2.80)	0.70	0.30	-	
24	1	尖根式	柳葉式A	-	(13.75)	3.30	0.80	0.20	7.20	0.55	0.30	(3.25)	片丸造
	2	尖根式	柳葉式A	-	(12.70)	3.20	0.80	0.30	6.70	0.50	0.30	(2.70)	片丸造
	3	尖根式	柳葉式A	-	(13.30)	3.10	0.90	0.20	7.70	0.50	0.30	(2.80)	片丸造
	4	尖根式	柳葉式B	C	17.60	3.90	0.90	0.20	8.40	0.60	0.35	5.30	
	5	尖根式	柳葉式B	C	(15.40)	3.10	1.00	0.30	9.00	0.60	0.30	3.30	
	6	尖根式	柳葉式B	C	(15.00)	3.00	1.00	0.20	9.80	0.60	0.30	(2.20)	別個体の頸部が付着
	7	尖根式	柳葉式B	D	(13.30)	3.40	0.90	0.25	8.60	0.60	0.30	(1.30)	
	8	尖根式	柳葉式B	C	(14.00)	3.20	0.80	0.25	7.50	0.50	0.40	(3.30)	
	9	尖根式	柳葉式B	C	(13.70)	2.90	0.80	0.25	7.70	0.60	0.35	(3.10)	
	10	尖根式	柳葉式B	C	(10.60)	3.40	1.00	0.25	8.00	0.60	0.40	(0.80)	
	11	尖根式	柳葉式B	C	(10.60)	3.50	1.00	0.30	(7.10)	0.60	0.35	-	
25	1	尖根式	柳葉式B	C	(13.30)	2.80	1.00	0.25	8.30	0.60	0.30	(2.20)	
	2	尖根式	柳葉式B	C	(12.10)	3.10	0.95	0.25	7.15	0.50	0.30	1.85	
	3	尖根式	柳葉式B	-	(13.90)	(2.40)	0.95	0.20	7.00	0.55	0.30	4.50	片丸造
	4	尖根式	柳葉式B	C	(11.35)	(1.90)	0.85	0.25	5.95	0.50	0.30	(2.50)	
	5	尖根式	柳葉式B	B	(11.10)	2.70	0.90	0.20	(8.40)	0.60	0.30	-	
	6	尖根式	柳葉式B	B	(9.30)	3.10	1.10	0.25	(6.20)	0.60	0.30	-	
	7	尖根式	柳葉式B	C	(10.60)	3.30	1.00	0.20	(7.30)	0.70	0.40	-	
	8	尖根式	柳葉式B	C	(7.70)	3.00	0.90	0.25	(4.70)	0.60	0.40	-	
	9	尖根式	柳葉式B	C	(9.10)	3.25	0.95	0.30	(5.85)	0.60	0.40	-	
	10	尖根式	柳葉式B	C	(7.70)	3.00	0.90	0.25	(4.70)	0.55	0.35	-	
	11	尖根式	柳葉式B	C	(6.40)	3.00	0.90	0.25	(3.40)	0.60	0.40	-	
	12	尖根式	柳葉式B	C	(5.80)	3.50	1.05	0.25	(2.30)	0.70	-	-	
	13	尖根式	柳葉式B	C	(5.90)	3.20	0.90	0.25	(2.70)	0.50	0.30	-	
	14	尖根式	柳葉式B	C	(4.60)	3.30	1.00	0.30	-	0.60	0.30	-	
	15	尖根式	柳葉式B	C	(4.90)	3.00	1.00	0.25	(1.90)	0.60	0.35	-	
	16	尖根式	柳葉式B	C	(5.85)	2.90	0.90	0.25	(2.95)	0.50	0.30	-	別個体の頸部が付着
	17	尖根式	柳葉式B	C	(5.30)	3.40	1.00	0.20	(1.90)	0.60	0.30	-	別個体の頸部が付着
26	1	尖根式	柳葉式C	D	13.10	3.20	0.80	0.20	5.80	0.50	0.30	4.10	
	2	尖根式	柳葉式D	-	18.30	3.20	1.20	0.20	9.90	0.60	0.40	5.20	
	3	尖根式	柳葉式E	F	(10.10)	4.55	1.05	0.20	(5.55)	0.60	0.30	-	
	4	尖根式	柳葉式E	D	(11.40)	4.60	1.00	0.20	4.80	0.65	0.30	(2.00)	
	5	尖根式	片刃箭式	-	(7.15)	3.40	0.75	0.30	(3.70)	0.60	0.35	-	
	6	尖根式	片刃箭式	-	(7.80)	3.60	0.80	0.30	(4.35)	0.45	0.30	-	
	7	尖根式	三角形	F	(10.85)	(1.00)	1.00	0.20	5.55	0.55	0.30	(4.30)	

※計測値の単位はcm、()は残存値

7 弓飾り金具（第26図）

両頭金具などとも呼ばれる金具で、筒状の金具（筒状部）に棒を差し込み、棒の先端を大きくして抜けないようにする。筒状部の両端には切り込みを入れ、花卉状に開くことを通例とする。弓を振ることによって筒状部内の棒が左右に振られて音を鳴らす、弓の飾り金具と考えられている。本古墳からは8点が出土しており、出土場所や法量は表4を参照されたい。

形状を子細に見ると、筒状部の両端に存在したはずの花卉状の切り込みは、大半が欠損している。棒の両端を加工して頭部を作りだしており、頭部がつぶれて扁平な板状を呈したもの（26-8～12）と球形を呈するもの（26-13～15）とに大きく分けることができる。筒状部の外側には直交方向に木質が確認され、これは弓本体の木質の方向を示している。筒状部や長さに違いが見られるのは、弓の装着した位置の幅によるのだろう。

（岩原 剛）

表4 弓飾り金具観察表

図番号	No.	出土ブロック	全長	筒状部		頭部		備考
				長	径	左径	右径	
26	8	B	3.25	2.40	0.40	0.45	0.50	頭部扁平
	9	B	(2.35)	(1.80)	0.40	-	0.65	頭部扁平
	10	B	3.10	2.20	0.40	0.50	0.50	頭部扁平
	11	B	2.90	2.00	0.45	0.40	0.65	頭部球形
	12	D	3.30	2.45	0.45	0.60	0.50	頭部右球形・左扁平
	13	-	3.20	2.20	0.55	0.60	0.60	頭部球形
	14	-	3.10	2.20	0.50	0.50	0.60	頭部球形
	15	-	2.70	2.10	0.40	0.55	0.55	頭部球形

※計測値の単位はcm、（ ）は残存値

8 刀子（第27図）

刀子は、図化可能なものをすべて示した。完形を留めるものは無く、副葬点数は関付近の数から11点以上はあるだろう。確認されたものはすべて両関の直角関で、片関のものは見られない。刃部は確認できるものはすべて平造である。出土場所や法量は表5を参照されたい。

法量から大型・中型・小型に分けることができ、大型は27-1~5・13、中型は27-7・8、小型は27-6・9~12が該当する。それぞれ用途や性質が異なるのだろう。以下に個別の特徴を述べる。

大型品 27-1・2は刃部の切先付近である。ふくらはわずかに張り、平造である。27-3~5は関及び茎付近である。茎は茎尻に向け直線的に延びて細くなり、27-3の茎尻は恐らく栗尻である。27-5は茎が太く茎尻は一文字尻である。茎尻直上に目釘が1か所打たれる。茎には木質が遺存する。27-13は刃部の切先及び中間付近が欠損するが、残存状態は良好で長さは23.5cmを測る出土刀子内で最長ものである。茎は茎尻に向け直線的に延びて細くなり、茎尻はわずかに丸みを帯びた栗尻である。茎に鹿角の痕跡がわずかに見られる。

中型品 27-7・8ともに切先が欠損するほか、27-7は茎尻も失われているが比較的残存状態は良い。27-7は刃部が反っているように見えるが、これは切先近くが衝撃で折れ曲がっているためである。27-8は、茎は茎尻に向け直線的に延びて細くなり、茎尻はわずかに丸みを帯びた栗尻である。27-7・8ともに茎には鹿角の痕跡が見られる。

小型品 いずれも切先は欠損し、27-6・9・10は茎尻付近も失われている。27-6は出土した刀子の中で唯一、筒金状の鍔が装着されている。27-9~12の茎には鹿角の痕跡がわずかに見られ、茎尻が遺存する27-11・12はいずれも栗尻である。27-11は刃部の使い減りが著しい。

（岩原 剛）

表5 刀子観察表

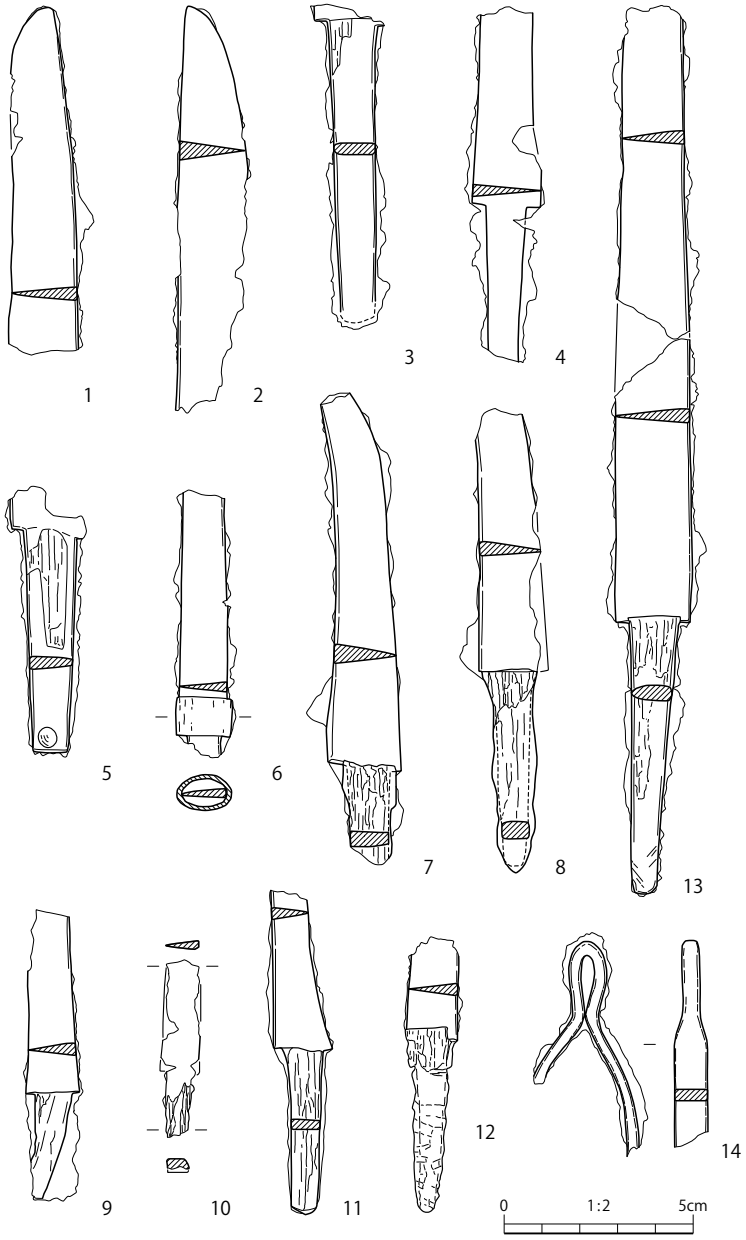
図番号	No.	出土 ブロック	全長	刃部			茎			備考
				長	幅	厚	長	幅	厚	
27	1	-	(9.10)	(9.10)	1.80	0.30	-	-	-	豊橋市保管
	2	-	(10.80)	(10.80)	(1.90)	0.50	-	-	-	
	3	D	(8.40)	-	-	-	7.90	1.10	0.30	
	4	-	(9.40)	(5.20)	1.80	0.30	(4.20)	1.00	-	
	5	-	(7.00)	(1.20)	2.00	-	5.80	1.20	0.30	
	6	C	(7.00)	-	1.30	0.30	-	-	-	鍬付属
	7	E	(12.50)	(10.00)	1.90	0.50	(2.50)	1.00	0.40	
	8	E	(12.10)	(7.00)	1.50	0.40	5.10	0.90	0.35	
	9	-	(7.70)	(4.85)	1.50	0.35	(2.85)	-	-	
	10	-	(9.30)	(5.70)	2.00	0.50	(3.60)	1.30	-	
	11	E	(8.50)	(4.20)	1.60	0.30	4.30	0.80	0.30	使いべりが著しい
	12	-	(7.20)	(2.70)	1.35	0.35	(7.20)	-	-	
	13	D	(23.50)	(16.30)	2.00	0.40	7.20	1.10	0.40	

※計測値の単位はcm、() は残存値

9 撮子 (第27図)

27-14が1点のみ出土した。撮子は撮子状鉄器(鉄製品)、毛抜状鉄器(鉄製品)などとも呼ばれるもので、用途は形状通りのピンセットのほか、大刀の佩用装置や砥石の懸垂具など諸説あり、本例も奥壁隅に立てかけられた大刀の近くから出土している。ピンセットとしての用途を基本としながら、刀装具の一部を構成した可能性がある。

持ち手部や先端部が失われているため、残存長は5.45cmを測り、環状に折り曲げた重ね合わせ部分の幅0.95cm、長さ2.0cm程度である。環状の部分は断面形が丸みを帯びた幅0.45cm、厚さ0.3cmの長方形を呈するのに対し、持ち手部分は幅を広げ、断面形は幅0.9cm厚さ0.3cmの板状を呈する。



第27図 刀子・撮子実測図

攝子は、朝鮮半島南部の原三国時代から三国時代にかけての墳墓で広く出土している。日本列島においては蕨手刀子と同様、中期初頭に出現し、大阪府や福岡県で確認できるとされる（吉田2001）。

参考として、東海地方の出土事例を表6に示した。中期の事例は比較的多く、良質な中期古墳が集中し主体部の調査例も多い静岡県西部（遠江地方）に分布が集中する。首長墳である五ヶ山B2号墳や千人塚古墳がある一方、小型古墳の寺山14号墳や長坂6号墳、龍門寺1号墳や小谷13号墳からも出土する。短甲との共伴事例が多いことは注意されてよく、韓半島から渡来した時点では、攝子は武装具の一部を構成したと考えられる。

後期においても静岡県での出土事例が多いが、分布は東部（駿河地方）の富士市域と西部（遠江地方）の東半部、岐阜県の船木山古墳群に集中する。この地域に共通した性質の集団があったことを物語る。また東海地方全域に言えることだが、無袖形石室からの出土例が多い。さらに中原4号墳の鉄鉗や石塚谷古墳周辺の生産遺跡とのかかわりを勘案すれば、各地域の首長膝下にあった渡来系鉄器製作集団との関連が想定される。そして寺西1号墳をはじめ中原4号墳や中里大久保古墳、大須二子山古墳、船木山G-29号墳、石塚谷古墳など豊富かつ優秀な武器・武具・馬具を保有する古墳からは、中期の伝統を受け継ぐ武人の装具としての側面と、渡来系技術者を組織内に取り込んだ有力者としての性質を認めることができる。

以上から、攝子は寺西1号墳の被葬者の性質を象徴する鉄器のひとつと言えるだろう。

表6 東海地方の攝子出土古墳

No.	古墳名	県	市	時期	特記事項
1	多田大塚4号墳	静岡県	伊豆の国市	中期後葉	横刃板鋌留短甲
2	谷津原7号墳	静岡県	富士市	後期後葉	無袖形石室か
3	中里大久保古墳	静岡県	富士市	終末期	無袖形石室
4	中原4号墳	静岡県	富士市	後期後葉	無袖形石室
5	杉森諏訪の池D10号横穴	静岡県	菊川市	終末期	横穴
6	篠ヶ谷A9号横穴	静岡県	菊川市	終末期	横穴
7	長福寺1号墳	静岡県	掛川市	後期後葉	金銅装馬具
8	五ヶ山B2号墳	静岡県	袋井市	中期前葉	三角板革綴短甲
9	石ノ形古墳西主体部	静岡県	袋井市	中期後葉	横刃板鋌留短甲
10	寺山14号墳主体部2	静岡県	磐田市	中期後葉	槍身銚
11	千人塚古墳主体部2	静岡県	浜松市	中期前葉	三角板革綴短甲
12	寺西1号墳	愛知県	豊橋市	後期後葉	無袖形石室
13	東山4号墳	愛知県	岡崎市	後期中葉	無袖形石室
14	大須二子山古墳	愛知県	名古屋市	後期前葉	挂甲
15	長坂6号墳	愛知県	尾張旭市	中期	木棺直葬
16	龍門寺1号墳	岐阜県	岐阜市	中期前葉	長方板革綴短甲
17	船木山G-29号墳	岐阜県	本巣市	後期中葉	複環式鏡板付轡
18	船木山K-103号墳	岐阜県	本巣市	後期末葉	無袖形石室
19	船木山G-215号墳	岐阜県	本巣市	後期	擬似両袖形石室
20	小屋城1号墳	三重県	津市	終末期	ベンガラ記号
21	小谷13号墳	三重県	松阪市	中期中葉	三角板鋌留短甲
22	石塚谷古墳	三重県	多気町	後期後葉	象嵌装大刀

※アミかけは中期。集成に際して大谷宏治・宮原佑治氏のご協力を得た
(岩原 剛)

10 馬具（第28・29図）

寺西1号墳からは、轡3組、金銅装帯金具4点、鏡吊金具2組、金銅装鞍金具破片3点、しおで金具2点、雲珠1点が出土した。

なお、出土位置は概ね奥壁側、左側壁奥壁側、玄門側の3箇所であるが、現在保管されている遺物は、長期保管の間に遺物の混在等が発生しているようで、遺物番号に混乱があることから、出土位置の特定は難しいことをあらかじめお断りしたい。

轡 立聞の数量等を考慮すると、鉄製轡3組が副葬されたことがわかる。いずれも造付立聞（岡安1984）に分類されるもので、大型矩形立聞環状鏡板付轡（岡安1984）である（以下、「環状鏡板付轡」は「円環轡」とする）。

轡A（28-1）は、鏡板、銜、引手の連結方法は、銜に鏡板と引手を連結する引手・銜共連法（岡安1984）、銜介在型連結（大谷2008a）であり、銜は二連銜である可能性が高い。引手壺は不明であるが、く字形である可能性が高い。残存状況が不良であることから鏡板の立聞部分に頸部が形成されているか不明確であるが（あったとしても短い）、鏝形（コ字形）の立聞を有する大型矩形立聞円環轡である。

当轡は、以上の特徴から、岡安光彦氏による大型矩形立聞円環轡のうち「宇洞ヶ谷型」に位置づけることが可能であり、TK43型式期に位置づけることができる（岡安1984）。

轡B（28-2）は、塊で出土したものを図上で展開した。鏡板、銜、引手の連結方法は、銜介在型連結で、銜は二連銜、引手は直柄引手である。鏡板は立聞に頸部が形成される回字形の立聞を有する大型矩形立聞円環轡である。当轡は、以上の特徴から大型矩形立聞円環轡のうち「谷口原型」（岡安1984）に位置づけられることからTK209型式期に位置づけるのが妥当である。

轡C (28-3) は、破片となってしまうため連結方法は不明である。鏡板は頸部が形成される回字形立聞の大型矩形立聞円環轡である。全体形状や法量が不明であることから詳細な位置づけは難しいが轡Bと同様の時期に位置づけられる可能性が高い。

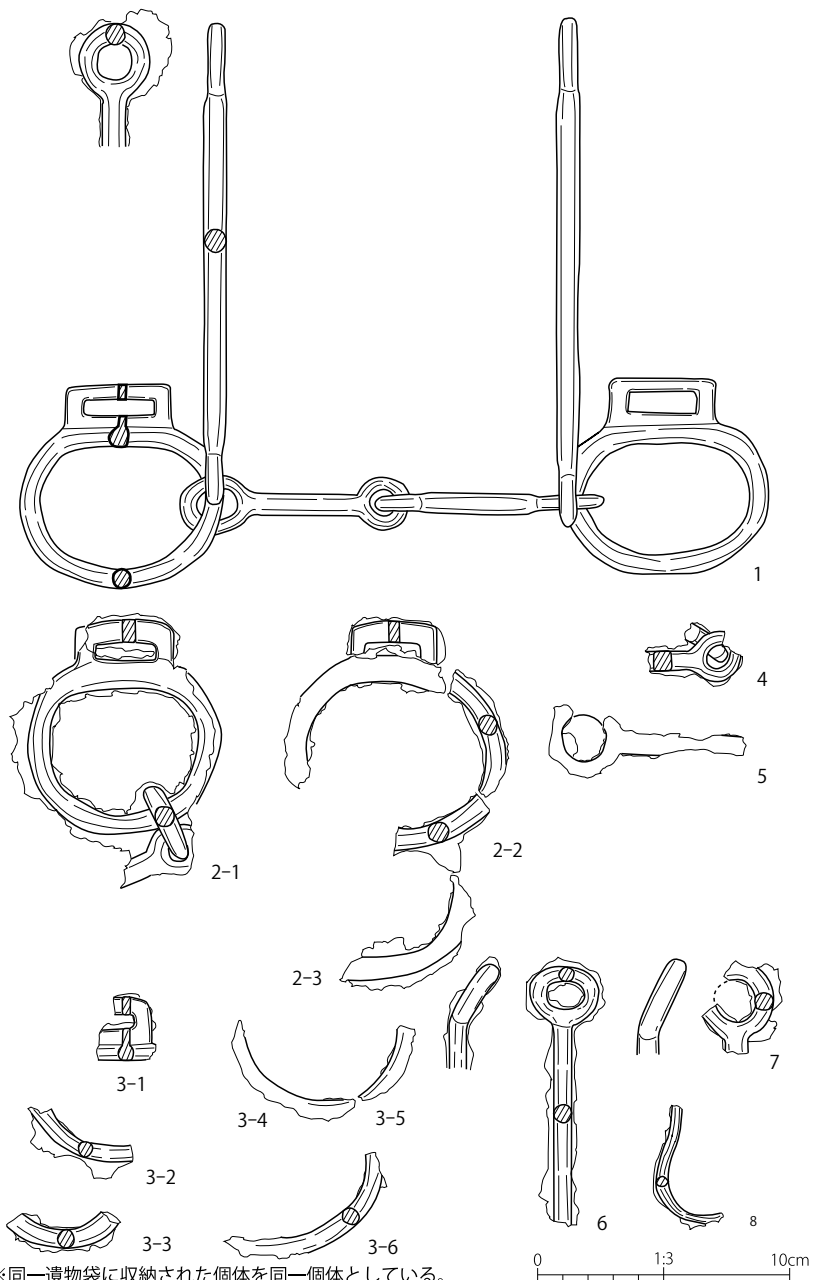
これ以外に、銜 (28-4・5)、引手 (28-6・7) は轡B・Cのいずれかに伴う可能性が高いが、現状では接合関係がなく、どちらの轡に伴うか不明である。B・Cともにく字形引手壺であった可能性が高い。

雲珠 半球状鉢雲珠 (29-9) が1点出土している。岐阜県大牧1号墳のような象嵌も施されておらず、現状では金銅装の痕跡はないが、金銅装であった可能性がある(註1)。残存状況が良好ではないため脚部は確認できず、本来無脚雲珠であったか、脚部が欠損したかの判断はできない。頂部に穿孔は確認できないことから、宝珠飾などは装着されていないことがわかる。鉢部には段は確認できない。帰属時期は不明確である。

鞍金具 鞍金具片3点 (29-10~12)、しおで金具2点 (29-13・14) が出土している。鞍金具29-10・11は鉄地金銅装磯金具破片の可能性が高い。2点ともに、裏側に織物が付着しており、木製鞍に織物、鉄地金銅板の順で鋏留めされた可能性が高い。織物は、芯に有機質のものがあり、それを巻き込むように織物が巻かれている。29-12は鉄地金銅装で、ゆるやかな湾曲があり、外縁であることがわかる。鞍金具、轡・杏葉の可能性があるが、明瞭な段差がないことから、鞍金具と判断した。金銅装鋏1鋏が確認でき、鋏は6mmである。

しおで金具 (29-13・14) は、座金具が金銅装で、低い半球状である。鋏具はきのこ形の平面形で刺金は伴わないものである。鞍金具破片及びしおで金具は、同一の鞍を構成する金具の可能性が高い。29-15はしおでの脚部の可能性が高い。

鞍金具の特徴やしおで金具は鋏具に刺金を伴わないことから、鞍金



※同一遺物袋に収納された個体を同一個体としている。

第28図 馬具実測図 (1)

具は宮代栄一氏による「覆輪を伴わず、磯と州浜形を別造りにする系列（幅の狭い縁金具を用いる）」である可能性が高く、宮代V期（TK43～TK209型式期）に位置づけることができる（宮代1996a）。

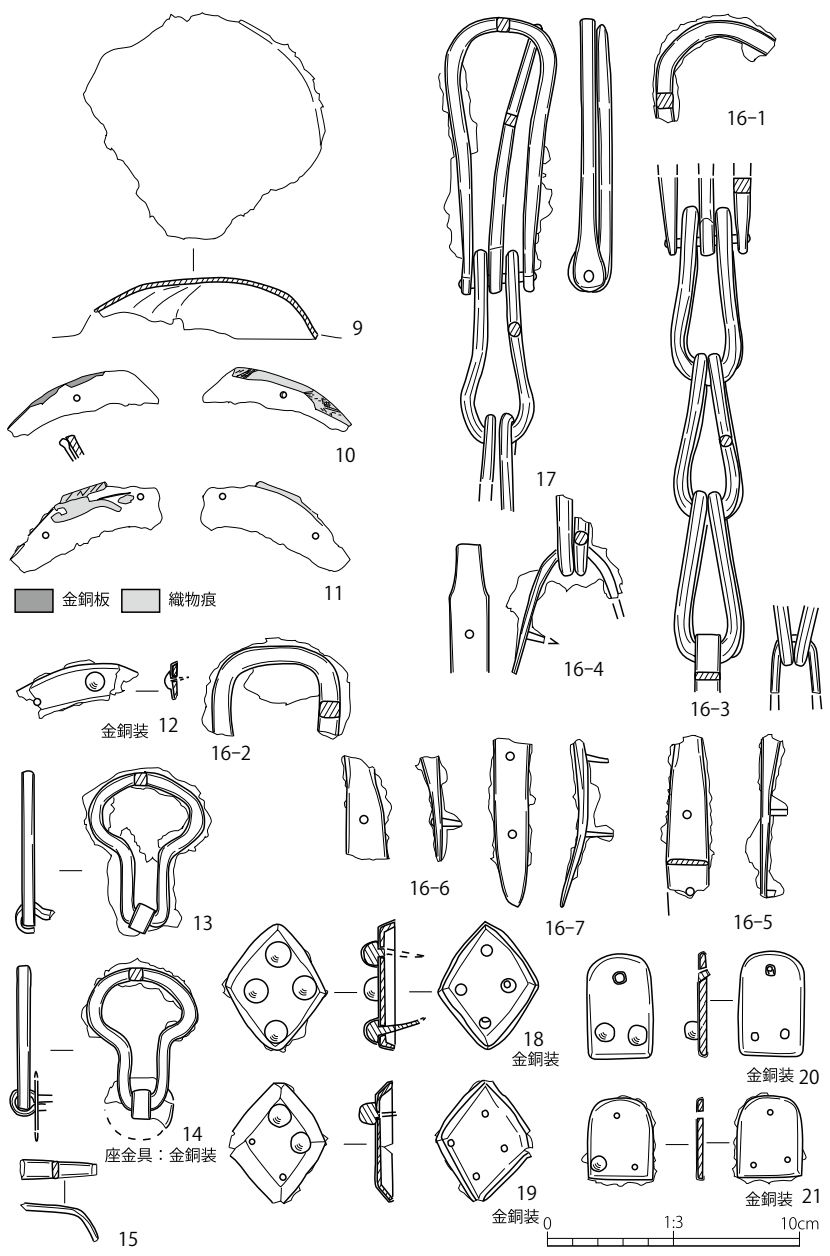
鏡 鏡は木製壺鏡であった可能性が高く、それを吊る吊金具（逆U字形金具）と兵庫鎖が出土している。兵庫鎖（29-16・17）が2点分存在するが、兵庫鎖の長さが異なること、29-16の破片に鉸具外枠の先端と想定できる金具が2点（29-16-1・16-2）出土していることから、29-16（鏡Aとする）・17（鏡Bとする）は別組である可能性が高い。

U字形吊金具は、破片となっており、長さや鉸数は不明確であるが、鉸は片側3鉸であった可能性が高い。

鏡A（29-16）は、兵庫鎖が三連であることから、斎藤弘氏の分類による3D類に位置づけることが可能であり、TK43～TK209型式期に位置づけることができる。鏡B（29-17）は、兵庫鎖が三連あるいは二連の可能性があり、斎藤氏の分類による三D式あるいは三E式に分類でき、前者であればTK43～TK209型式期、後者であればTK209型式期に位置づけることが可能であり（斎藤1986）、筆者は轡の时期的位置づけから後者の可能性が高いと考える。

鉸具 鉸具（28-8）は外枠が出土している。刺金が伴うか不明である。これ以外にも鉸具の破片の可能性のあるものが確認できる。

帯金具 帯金具（29-18～21）は、金銅装菱形2点（29-18・19）と、金銅装半円方形2点（29-20・21）が出土した。菱形2点は鉄地金銅装で、断面はコ字形であり、同法量であることから、後述するように（大谷考察参照）面繫の交差点に「辻金具」として用いられた可能性が高い。半円方形2点は、鉄地金銅装板状である。2点の大きさが異なることから、別々の馬装に伴うものであったか、同一馬具でも使用箇所が異なる可能性が想定できるが、面繫のうち鏡板を吊る帯（革）紐を



第29図 馬具実測図（2）

表7 寺西1号墳出土馬具の編年的位置

馬具	TK10	TK43	TK209	飛鳥Ⅱ	文献
轡A		■			岡安1984
轡B			■		岡安1984
轡C			■		岡安1984
鏡A		■			斎藤1986
鏡B		■	■		斎藤1986
菱形帯金具		■	■		岡安1987
半円方形帯金具		■	■	■	岡安1987
鞍金具		■	■		宮代1996a
		初葬	追葬		

固定する金具の可能性が高い。帯金具は、菱形が断面コ字形であることから、TK43～TK209型式期に、半円方形のものはTK43～飛鳥Ⅱ期までに位置づけることができる（岡安1987）が、他の馬具がTK43～TK209型式期に位置づけられることから半円方形帯金具についてもTK43～TK209型式期の可能性が高い。

馬具の時期的位置づけ 以上、馬具について報告したが、最後に馬具の編年的位置づけを確認しておきたい。なお、馬装の復元や馬具が3組副葬される意義については、考察で改めて分析を行う。

寺西1号墳出土馬具それぞれの時期的位置づけを示したのが表7である。馬具は、TK43型式期に位置づけられるもの（轡A、帯金具、鞍金具、鏡A）と、TK209型式期（轡B、轡Cと鏡B）に位置づけることができることが明らかになり、少なくとも2時期に位置づけることが可能である。

3組のうち、1組目（Aセット）は、轡A＋帯金具＋鞍金具＋鉄製雲珠＋鏡Aであった可能性が高い。2組目（Bセット）は轡B、3組目（Cセット）は、轡Cが轡で、いずれかに鏡Bが伴う可能性が高い。

（大谷宏治）

註

- 1 宮代栄一氏のご教授によれば、氏が実見した雲珠で無象嵌の鉄製雲珠はほとんど確認されておらず、半球状鉢は金銅装であったものの金銅装が失われた可能性が高い。ただし、群馬県綿貫観音山古墳に無象嵌で鉢が高い半球状鉢八脚雲珠が出土していることから、このような雲珠の可能性も排除できない。

なお、氏によれば、金銅装半球状鉢雲珠で杏葉を伴わない馬装では、雲珠は8・10・12脚のもので占められるという。

11 乳脚文鏡（第30図）

乳に細線による文様表現を付加した文様を主像に採用する系列の倭鏡である。乳文鏡（樋口1979）、乳脚文鏡（森下1991）などと呼称される。直径9.1cm、重さ48gである。厚さは内区で最大2mm、外区では1mm程度となる部分があり、内区が厚く、外区が薄い鏡体をもつ。銹に覆われた部分があるが、明瞭な有機質の付着は確認できない。

文様構成

中心に小ぶりながら半球形の鈕がある。鈕孔は幅約4～5mm、高さ約2mmであり、長方形を呈する。鈕孔下辺は鏡背面と同じ高さにある。鈕の外周をめぐる鈕座は、1条の圈線のみである。

内区主文部は直径に比して幅が狭く、7個の乳脚文を主像とする。乳は頂部がやや丸みを帯びた形状である。乳に細線によって付加された文様は蕨手状の文様である。この「し」の字状を呈した蕨手文の先端が巻く方向は同一方向に旋回するのではなく、上下あるいは左右に対称をなすか、ランダムに配置される点が特徴的である（第6章6のa ii系の主文様）。



第30図 鏡の三次元画像と断面図

内区外周部は8個と推定される珠文によって区画され、各区画には「I」字状あるいは「J」字状の擬銘と思われる文様が配される。

外区は2帯の文様帯からなり、内側が変形した複合鋸歯文帯、外側が櫛歯文帯である。文様帯と縁部の境界はわずかに圏線状となる部分が多いが、かろうじて段差を残すところもある。縁部は内側に水平に近い面があり、弱く屈曲して端面に至る。斜縁を指向しつつも、薄く扁平な形態を呈する。

鑄造・研磨

表面観察では、湯口を反映する鑄引けや鑄巣などを確認することはできない。仕上げの研磨は鏡面と縁端面、縁部上面にみとめることができるが、外区文様帯から内側には顕著には確認できない。鈕については、銹のため研磨の有無は不明である。

位置づけ

森下章司の分類ではe系（森下1991）、加藤一郎の分類ではB系b式に相当し、須恵器のMT15～TK10型式段階に比定される（加藤2017）。岩本分類では蕨手文系に分類される例である（岩本2017b）。後述（第6章6）するように、類例の副葬年代はTK43型式期を中心とすることから、それらの製作年代がTK43型式期を大きく遡ることはないと考ええる。

図出典 三次元画像：初村武寛氏計測、断面図：岩本実測。

（岩本 崇）

12 須恵器（第31～38図）

須恵器は石室内及び石室外からの出土品があるが、石室外出土品はわずかで、多くが石室内からの出土である。石室内の須恵器には、提瓶9点、脚付鉢1点、甗2点、台付長頸瓶1点、壺2点、鳥鈕蓋付台付壺1合、壺付蓋付台付壺1合がある。以下器種別に報告を行う。

提瓶 31-1～35-1は提瓶である。31-1は器高24.1cm、口径8.5cm、胴径17.3×14.9cmを測り、打ち欠きのためか口縁部が20%程欠失するが、それ以外完形である。胴部外面は平行タタキの後、閉塞部とは逆側にカキメが施され、縦方向に1本の凹線が施される。胴部外面の凹みから円盤閉塞、頸基部内面の様子から穴を空けた後に口頸部が貼り付けられていることがわかる。口頸部内外面は回転ナデにより仕上げられ、頸部中位に二重凹線を持つ。外反する口縁部は端部が断面三角形となり、その直下に突帯が巡る。色調は明灰色で、焼成良好である。胎土は密で2mm以下の白色砂粒をまばらに含み、黒色斑点もある。肩及び口縁部内面の全周に緑色の灰釉層が見られる。口縁部外面の火前と想定される側に明らかに自然釉が見られ、同一側には肩部から胴部下にかけて大きく釉垂れが生じている。底部付近に鉄錆が付着する。胴部中位あたりに返り付きの杯蓋ないし壺・瓶類の返り付蓋が融着している。

31-2の提瓶は、器高23.8cm、口径8.6cm、胴径18.3×15.6cmを測り、胴部の一部及び口縁部の50%程が欠失する。胴部外面の閉塞部側は平行タタキの後カキメが施され、閉塞部と逆側は回転ヘラ削りの後カキメが施される。胴部外面には縦方向に1本の凹線が、閉塞部側に2本の凹線が施される。胴部内面は回転ナデで仕上げられる。胴部内面の様子から円盤閉塞、頸基部内面の様子から穴を空けた後に口頸部が貼り付けられていることがわかる。口頸部内外面は回転ナデにより仕



第31図 石室内出土須恵器（1）

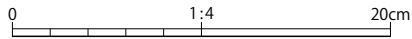
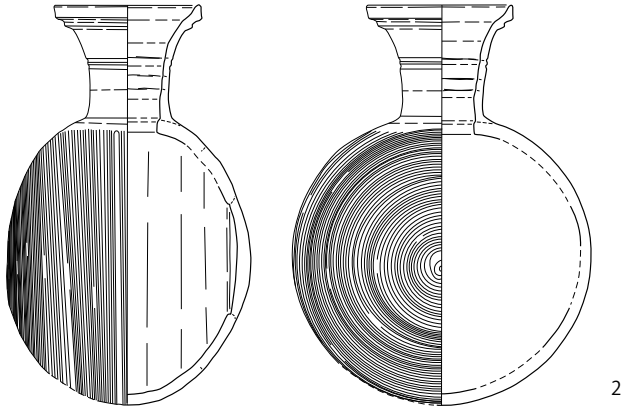
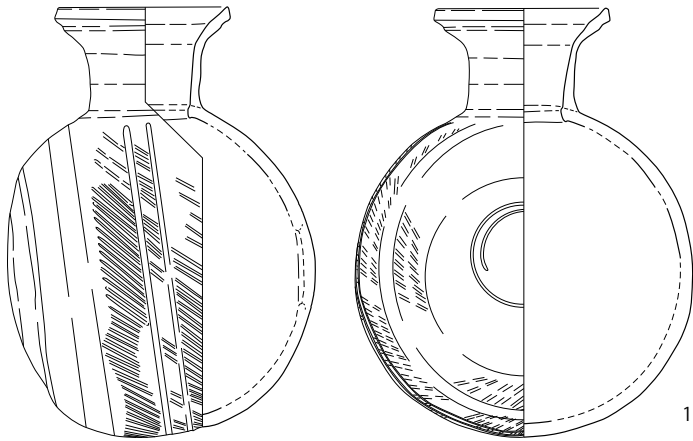
上げられる。頸部中位に二重凹線を持ち、外反する口縁部は端部が断面三角形となり、その直下に突帯が巡る点は31-1と類似する。色調

は暗灰色で、焼成良好である。胎土は密で径1 mm以下の白色砂粒をまばらに含み、黒色斑点もある。肩及び口縁部内面の全周に緑色～暗緑色の灰釉層が見られる。胴部は釉垂れが顕著で、口頸部外面には火前と想定される側に明らかな自然釉が見られる。

32-1の提瓶は、器高22.7cm、口径8.9cm、胴径17.9×16.3cmを測り、口縁部に小欠があるのみで完形である。胴部外面は、縦方向の最大径のあたりからやや閉塞部寄りにかけて平行タタキ痕が残り、閉塞部側は回転ナデにより仕上げられる。閉塞部と反対側は回転ヘラ削りが施されるが、実測図の左手側は緩い回転ナデが施される。胴部外面には縦方向に2本の凹線が、閉塞部側に2本の弱い凹線が施される。胴部内面は回転ナデで仕上げられる。胴部内面の様子から円盤閉塞、頸基部内面の様子から穴を空けた後に口頸部が貼り付けられていることがわかる。口頸部内外面は回転ナデにより仕上げられ、外反する口縁部は端部が四角形で、その直下が緩い段となる。色調は灰色で、焼成良好である。胎土は密で径1 mm以下の白色砂粒をまばらに含む。

32-2の提瓶は、器高21.2cm、口径7.8cm、胴径15.8×12.9cmを測り、口縁部に小欠、底部に7×6 cm程の欠失部がある。胴部外面は回転ヘラ削りの後カキメが施され、内面は回転ナデが施される。胴部外面は縦方向に1本の凹線が施される。胴部内面の様子から円盤閉塞、頸基部内面の様子から穴を空けた後に口頸部が貼り付けられていることがわかる。口頸部内外面は回転ナデにより仕上げられる。頸部中位に二重凹線を持ち、外反する口縁部は端部が断面三角形となり、その直下に突帯が巡る点は31-1・2と類似する。色調は灰色で、焼成良好である。胎土は密で径1 mm以下の白色砂粒をまばらに含み、径5 mm以下の白色礫も含む。

33-1の提瓶は、器高16.5cm、口径5.9cm、胴径13.1×9.1cmを測り、口縁部は40%程欠失している。胴部外面は回転ヘラ削りの後カキメ



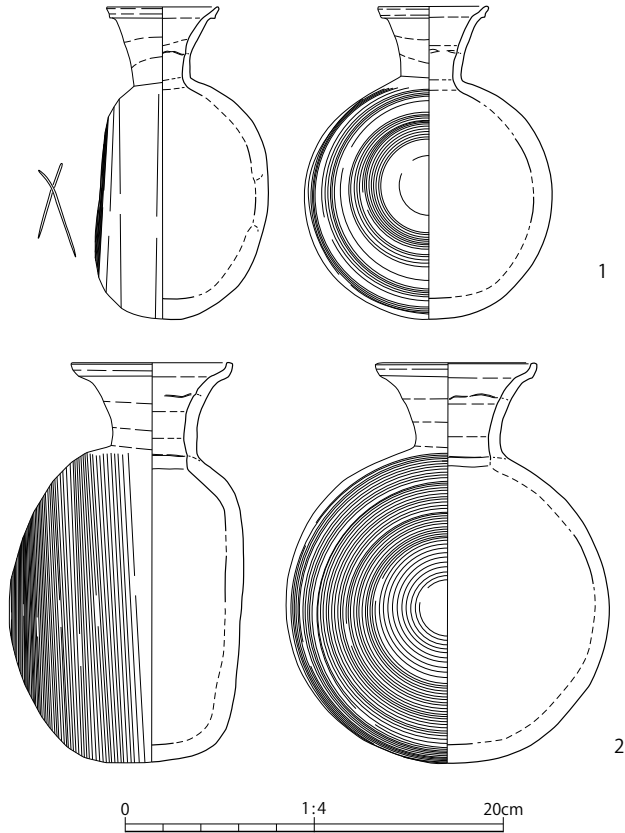
第32図 石室内出土須恵器（2）

が施されるが、図示した通り胴部全体に施されることは無く、余白を残す。胴部は円盤閉塞が行われているものと考えられる。胴部外面の閉塞部と逆側には「×」のヘラ記号が刻まれる。口頸部内外面は回転

ナデにより仕上げられる。頸部は緩く外反しつつ立ち上がり口縁部に至るが、口縁端部の直下が突帯状となり縁帯を成す。色調は灰色で、焼成良好である。胎土は密で、径1mm以下の白色砂粒をわずかに含み、黒色斑点がある。胴の閉塞部側を上にして窯詰されたか、閉塞部側に自然釉が確認できる。

33-2の提瓶は、器高21.2cm、口径8.6cm、胴径17.1×12.4cmを測り、口縁部と胴部に小欠が多い。胴部外面は閉塞部と逆側になると考えられる平らな部分が未調整だが、それ以外は回転ヘラ削りが施され、図示した部分についてはカキメが施される。頸基部内面の様子から穴を空けた後に口頸部が貼り付けられていることがわかる。口頸部内外面は回転ナデにより仕上げられる。頸部は基部から外反し、口縁部で内側に屈曲するが明確な縁帯とはならない。色調は黒色から黒灰色で焼成は良好である。胎土は密で、径1mm以下の白色砂粒をわずかに含む。口頸部から肩部にかけて自然釉が認められる。

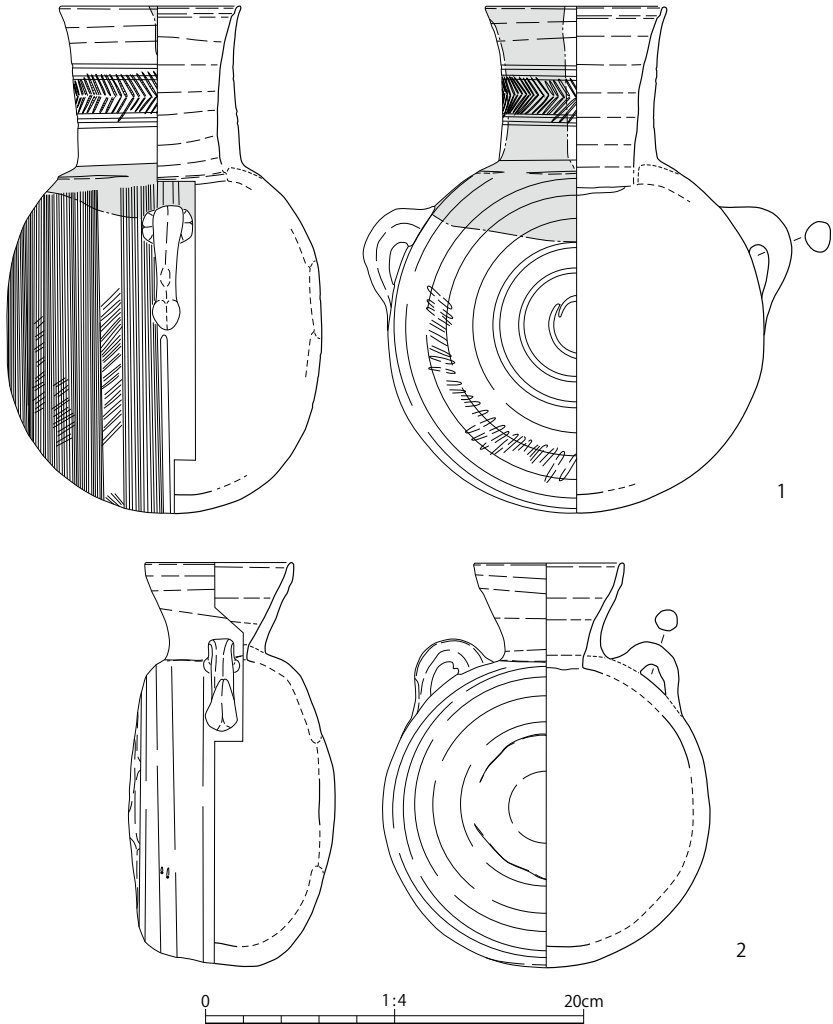
34-1の提瓶は、器高26.8cm、口径9.6cm、胴径19.9×16.7cm、耳を含めた幅は23.0cmを測る。口縁部に2箇所小さく欠失部があるが深めに欠けており、打ち欠きの可能性もある。胴部は平行タタキの後回転ヘラ削りが施され、図示した通り閉塞部の逆側を中心にカキメが施される。胴部に縦方向に1本凹線が施され、閉塞部側には凹線による圏線が3重に施されている。胴部内面の様子から円盤閉塞、頸基部内面の様子から穴を空けた後に口頸部が貼り付けられていることがわかる。口頸部は回転ナデにより仕上げられ、頸基部は太い。頸部は基部から直立気味に立ち上がり、口縁部に向けてやや外反する。口縁部は縁帯を形成せず、端部内面は段となる。頸部中位には、二重沈線で上下を区画し、櫛歯列点文を逆「く」字形に連ねる。肩から胴部最大径の間程に二つの耳が付けられるが、粘土紐を肩部側にまず接着してから、屈曲させて胴部最大径側にナデつけて接着する。色調は灰色で、



第33図 石室内出土須恵器（3）

焼成は良好である。胎土は密で径1mm以下の白色砂粒をまばらに含み、黒色斑点もまばらに見られる。肩部の全周に灰釉層が認められ、口頸部外面の火前と考えられる面には明らかな自然釉が見られる。肩部周辺に鉄錆の付着がある。

34-2の提瓶は、器高21.4cm、口径8.0cm、胴径17.3×11.0cmを測り、口縁端部に15%程の欠失部がある以外は完形である。胴部の閉



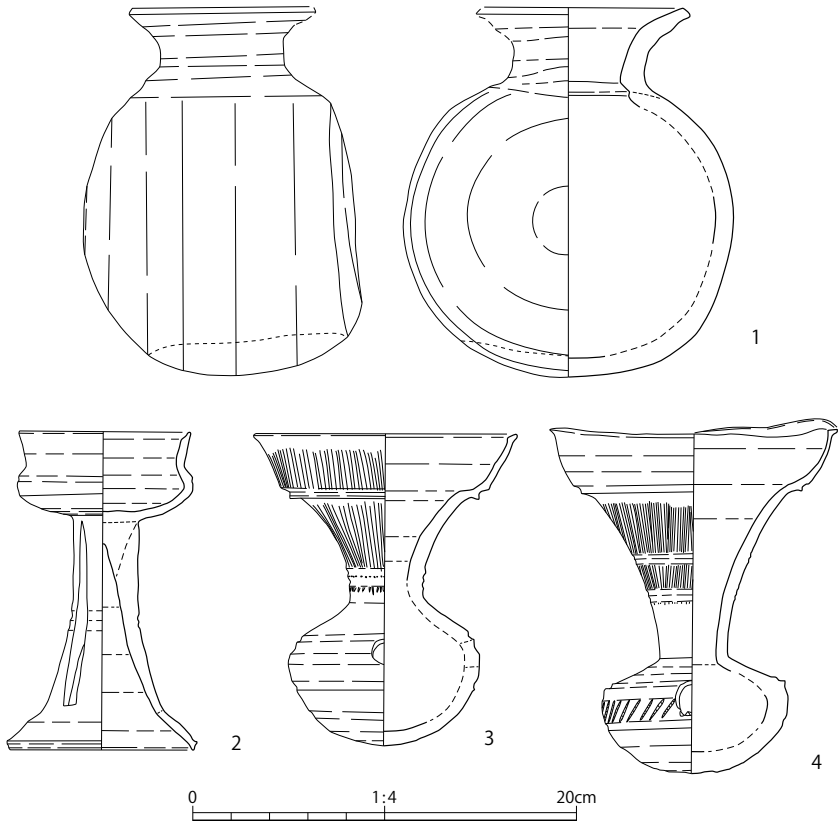
第34図 石室内出土須恵器（4）

塞部と逆側は回転ヘラ削りが施され、平らに近い部分には指頭痕も認められる。閉塞部側は概ね回転ナデにより仕上げられる。胴部内面の様子から円盤閉塞、頸基部内面の様子から穴を空けた後に口頸部が貼

り付けられていることがわかる。口頸部内外面は回転ナデにより仕上げられ、頸部は基部から比較的直線的に外に開き、口縁部にかけてやや内向きに角度を変えて立ち上がり端部に至る。口縁部に縁帯は形成しない。肩部の頸基部寄りに二つの耳が付けられるが、粘土紐を頸基部側にまず接着し、屈曲させて胴部最大径側にナデつけて接着する。色調は黒灰色から暗灰色で、焼成は良好である。胎土はやや粗く、径2mm以下の白色砂粒を比較的多く含む。底部付近に鉄鑄の付着がある。

35-1の提瓶は、器高19.4cm、胴径17.2×14.5cmを測り、口縁部が60%程欠失している以外は完形である。胴部は平らな側にヘラ起こしの様子が確認でき、その他は回転ヘラ削りと回転ナデにより仕上げられる。口頸部は回転ナデにより仕上げられ、内面には口頸部と胴部の接合が観察される。頸基部は太く、やや外反して立ち上がった後、強く外反して口縁部へ至り、口縁端部は面取り気味におさめる。特に口頸部については、他の提瓶よりも厚手の無骨な作りである。底部側に重ね焼きの痕が確認でき、粃殻痕も見られる。底部に「一」のヘラ記号がある。色調は重ね焼きにより降灰の無い箇所は灰色、降灰のある所は暗灰色で、焼成は良好である。胴部の平らな側の内面に大きめの火膨れがある。胎土は密で、径1mm以下の白色砂粒をわずかに含み、黒い吹き出しも認められる。

脚付鉢 35-2は脚付鉢で、器高16.7cm、口径8.9cm、脚端部径9.6cmを測り、完形である。鉢部は、底部から腰部外面が回転ヘラ削り（轆轤は右回転）、それ以外が回転ナデにより仕上げられる。胴部最大径よりもやや上に一条の凹線が巡る。口頸部は直線的に外に開き、口縁端部に緩い段を持つ。脚部は長脚で、透孔は三方向に配される。三つの透孔の内、二つは上半部がスリット状となる。脚部は全体に回転ナデにより仕上げられ、基部からほぼ垂直に下りた後、中位でやや外方に角度を変え、透孔の下端あたりで更に外方に角度を変えて内湾気味



第35図 石室内出土須恵器（5）

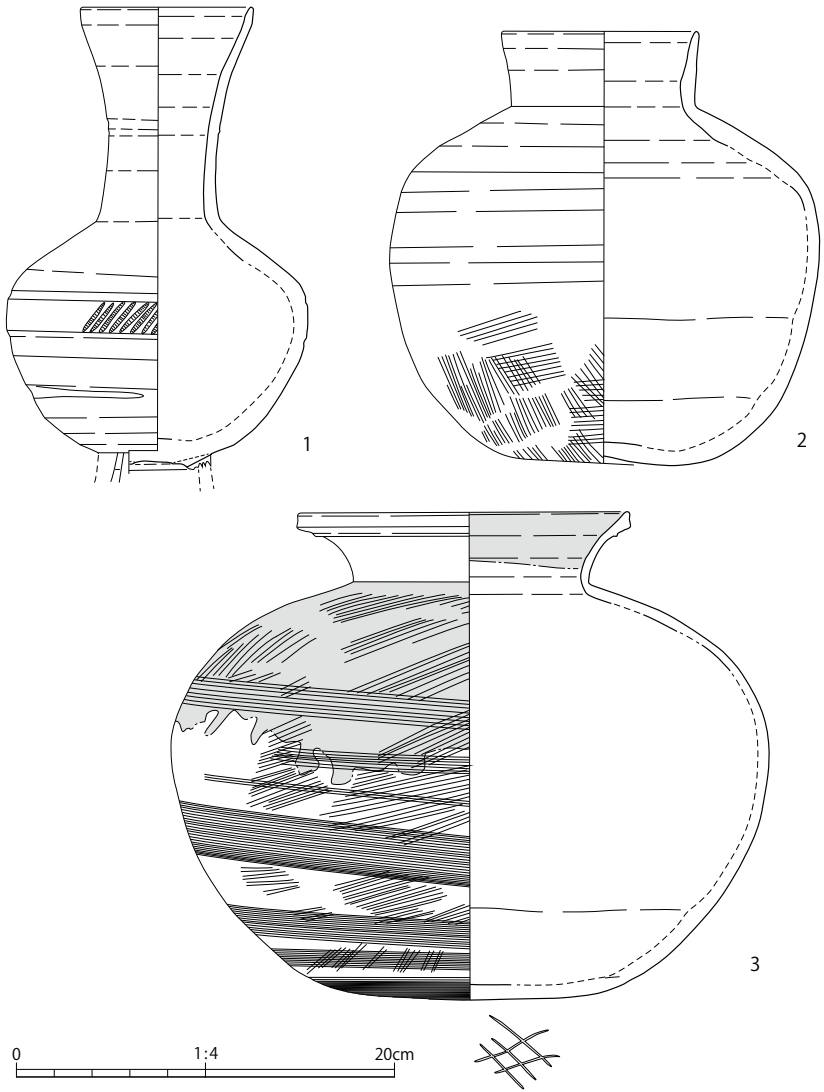
に脚端部に至る。脚端部はやや凹む形で面取りされ、端部直上が突帯風になる。脚部中位には二重凹線が巡らされる。色調は灰白色で、焼成良好である。胎土は砂粒がやや多く、径1mm内外の白色砂粒、径1mm以下の雲母を含む。

罎 35-3・4は罎である。35-3は器高16.3cm、口径13.8cm、胴径10.0cmを測り、口縁部の30%程が欠失している。丸底で底部は回転ヘラ削りで仕上げられ（轆轤は右回転）、胴部から口縁部の外面、内

面は回転ナデにより仕上げられる。胴部最大径は胴部中位よりもやや上にあり、円孔は胴部最大径よりもやや上に穿たれる。円孔の上半から直上、下方に凹線が巡る。頸基部から大きく外反し、幅広の二重口縁に至る。口縁端部は面取りされる。頸部下方に凹線とナデにより三重に突帯が巡らされ、二重口縁の下方にも突帯が巡らされる。口縁部から頸部にかけて縦方向のハケメないし櫛目が施されるが、順序としては頸部の凹線・突帯が巡らされた後である。色調は褐灰色で、焼成は良好である。胎土は粗く、径1mm内外の白色砂粒を比較的多く含み、黒色斑点も認められる。

35-4の甗は器高18.0cm、口径15.0cm、胴径9.7cmを測り、口縁部の40%程が欠失している。丸底で底部は回転ヘラ削りで仕上げられ（轆轤は右回転）、胴部から口縁部の外面、内面は回転ナデにより仕上げられる。胴部最大径は胴部中位よりもやや上にあり、円孔は胴部最大径のあたりに穿たれる。円孔の上半から直上に凹線が巡り突帯が作り出され、円孔の下方にも凹線が巡る。頸基部から大きく外反し、幅広の二重口縁に至る。口縁端部は面取りされる。頸部中位に二重凹線が2段に巡らされ、二重口縁の下方には突帯が巡らされる。頸部に縦方向のハケメないし櫛目が施される。色調は灰色で、焼成は良好である。胎土は密で、径1mm内外の白色砂粒をまばらに含み、黒色斑点も認められる。

台付長頸瓶 36-1は台付長頸瓶で、残存高24.5cm、口径8.9cm、胴径16.0cmを測り、口縁部の50%程と台部は欠失している。腰部は回転ヘラ削り、胴部から口縁部外面、内面は回転ナデにより仕上げられる。胴部最大径のあたりに、上下の凹線で区画し櫛歯列点文を施している。頸部はほぼ垂直に立ち上がった後緩く外反し、口縁部に至る。頸部中位には鈍い二重凹線が巡る。欠失しているが、残存部から台部には3方向に長方形透孔が穿たれていたと復元される。色調は灰



第36図 石室内出土須恵器（6）

色で、焼成良好である。胎土は密で、径1mm以下の白色砂粒をまばらに含み、黒色斑点も比較的多く認められる。肩から胴にかけてのほぼ全周に緑色の灰釉層が見られる。口頸部外面の広範囲にも同様の灰釉層が見られるが、火裏と想定される面には認められない。ただし上記には、明らかに灰釉層が剥落したと想定される部分も含む。

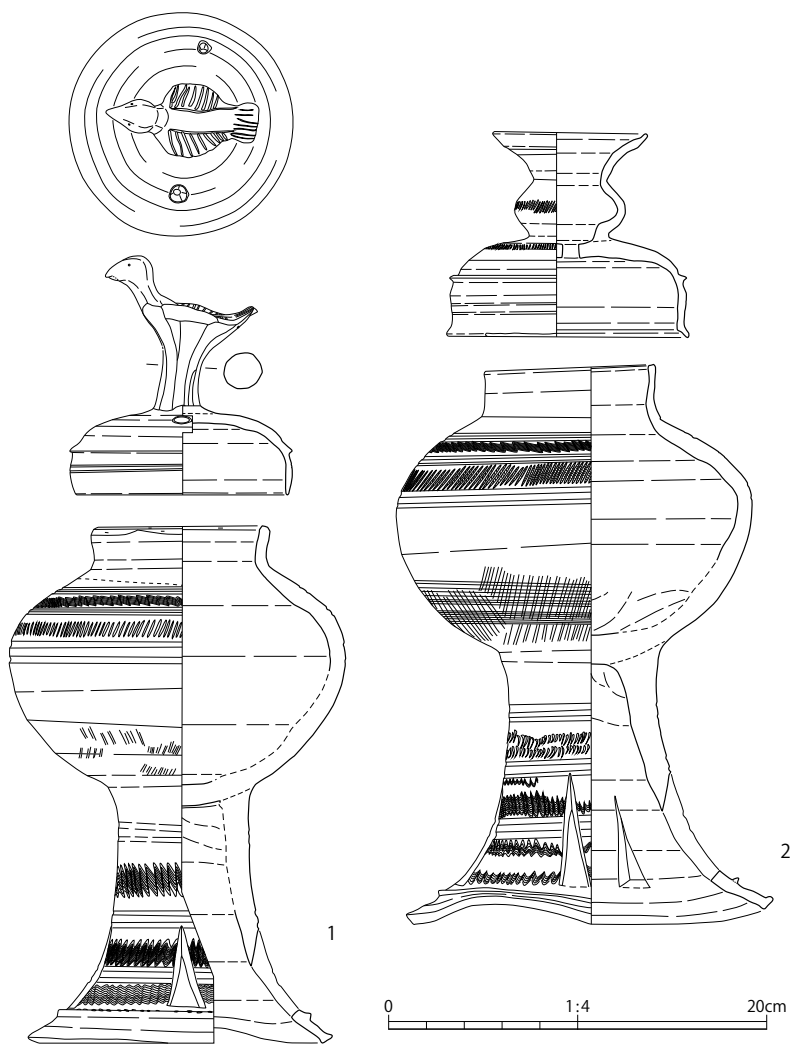
壺 36-2・3は壺だが、36-2は直口、36-3は広口と形式が異なる。36-2は器高23.9cm、口径10.4cm、胴径22.8cmを測り、口縁部などに小欠損はあるがほぼ完形である。底部は明確な平底にはならないが、丸底でもなくやや凹んだ形になる。胴部最大径より下から底部にかけて平行タタキ痕が明瞭に残り、胴部最大径から肩部にかけては回転ヘラ削り、肩部から口縁部にかけては回転ナデにより仕上げられる。口縁部から肩部までの内面は回転ナデ、胴部以下の内面は横ナデにより仕上げられる。頸基部から口縁部にかけてやや外傾しつつ直線的に立ち上がり、口縁部に至る。短頸とも長頸とも分類しづらい、中間的な口頸の長さである。色調は黒灰色で、焼成良好である。胎土はやや粗く、径2mm以下の白色砂粒を含み、径5mm以下の白色礫も数粒視認できる。

36-3の壺は器高25.8cm、口径17.6cm、胴径31.6cmを測り、口縁部は30%程欠失している。底部は明確な平底にはならないが、かなり扁平気味な丸底である。胴部最大径はほぼ胴部中位にあり、底部から肩部にかけて平行タタキ痕が見られ、全面ではないがカキメも施される。口頸部の内外面は回転ナデにより仕上げられ、肩部から下の内面については、無文当具があてがわれた後、ナデで仕上げられているものと考えられる。頸部は基部から外反して大きく開き、口縁端部断面はやや凹む四角形を呈し、その下には突帯が巡らされる。底部と腰部の境界付近には凹線が一条巡り、底部には図示したようなヘラ記号が施されている。色調は灰色で、焼成良好である。胎土は密で、径

1 mm以下の白色砂粒をまばらに含む。肩部及び口頸部内面の全周にべったりと濃緑色の灰釉層が認められる。肩部の灰釉層は釉垂れが胴部最大径よりも下方まで至るものもあり、火前と考えられる面は底部際まで釉の雪崩が生じている。口頸部外面は、火前の一部のみに明らかな自然釉が見られる。胴部最大径付近に鉄鑄の付着箇所がある。

鳥鈕蓋付台付壺 37-1は鳥鈕蓋付台付壺で、総高37.2cmを測る。蓋は合子形蓋杯の蓋と同様の形に鳥鈕の付くもので、器高12.6cm、口径11.1cm、最大幅11.7cm、鳥鈕の幅は8.1×4.0cmを測り、小欠はあるが完形である。蓋は天井部外面に回転ヘラ削りが施される以外は回転ナデにより仕上げられている。しっかりとした稜を持ち、そこから内湾しつつ口縁部に至り、端部は丸くおさめる。稜の下方には二重沈線が施される。天井部には鳥鈕の向きに直交する位置に、焼成前に施された二箇所の穿孔がある。鳥鈕は手づくねで作られるが、軸部から鳥下部にかけて縦方向の削りが施され、鳥部分はナデにより仕上げられている。羽は閉じた状態だが、横方向に幅を持った形であり、上面に羽毛を表現した線刻が施される。目は小さく刺突されて表現される。口部分は下に粘土を少し貼り足して線刻により表現される。

台付壺の壺部は短頸壺の形を取り、器高27.4cm、口径9.2cm、胴径17.8cm、脚端部径16.0cmを測り、口縁部が20%程欠失する他、脚部などに小欠がある。壺の腰部は回転ヘラ削りで仕上げられるが、所々平行タタキ痕が残る。胴部から口縁部にかけてと内面は回転ナデで仕上げられる。口縁端部には回転ヘラ削りが施される。胴部最大径から肩部にかけて二重沈線が3段巡らされ、その間に列点文と波状文が施される。頸基部よりやや下に蓋の重ね焼きによる色の変化が認められる。脚部はラッパ形に開き、脚端部は面取りされ断面がやや撥形となる。脚部内外面は回転ナデにより仕上げられる。脚端部の上方には突帯が巡り、脚部下半には三角形の透孔が4方向に穿たれる。脚部には



第37图 石室内出土須恵器（7）

二重凹線が3段巡らされ、その間に波状文が施される。なお、透孔は凹線と波状文の施文の後に穿たれている。脚端部を中心にやや焼き歪みがある。蓋・台付壺とも色調は灰色で、焼成良好だが、台付壺の脚部下方はやや焼きが甘い。胎土は密で、径1mm以下の白色砂粒をまばらに含む。

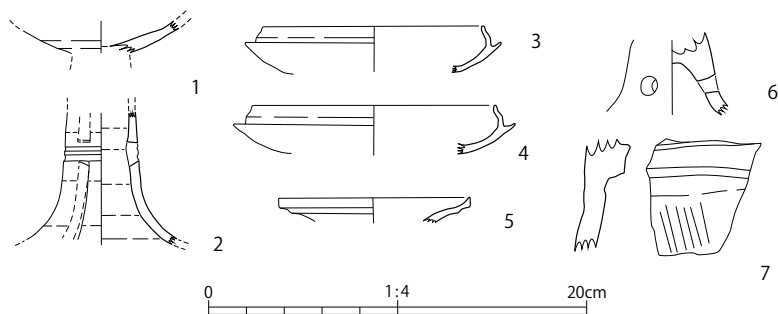
壺付蓋付台付壺 37-2は壺付蓋付台付壺で、総高37.2cmを測る。蓋は合子形蓋杯の蓋と同様の形に広口壺が付くもので、器高10.9cm、蓋口径12.8cm、壺部口径8.2cm、胴径5.9cmを測り、壺部口縁部の20%程が欠失する（以下、壺付蓋の壺部について「子壺部」と記述する）。蓋部は天井部が回転ヘラ削り、それ以外が回転ナデにより仕上げられる。しっかりとした稜を持ち、口縁部は垂下した後外方に引き出され、端部内面はやや凹む形で面取りされる。口縁部外面にかなり鈍い二重凹線が巡らされる。天井部には円孔があり、子壺部内面まで筒抜けの状態となっている。子壺部はもともと底抜けの状態で成形されたと考えられ、胴部最大径をはるかに凌駕する口径を持つ。内外面とも回転ナデにより仕上げられる。口頸部は大きく外反し、口縁端部内面は凹む。蓋部天井部と子壺部胴部に列点文が施される。

台付壺の壺部は短頸壺の形を取り、器高29.7cm、口径9.1cm、胴径18.9cm、脚端部径19.3cmを測り、脚端部の25%程が欠失する。壺部は底部から腰部にかけて平行タタキ痕が残り、カキメが施される。胴部から口縁部の内外面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデにより仕上げられる。口縁端部は断面矩形になるが上面が少し凹む。胴部最大径から肩部にかけて二重沈線が3段に巡らされ、その間に波状文と櫛歯列点文が施される。脚部はラッパ形に開き、脚端部は面取りされ、断面がやや撥形となる。脚部内外面は回転ナデにより仕上げられる。脚端部の上方には突帯が巡り、脚部下半には三角形の透孔が5方向に穿たれる。脚部には二重凹線が3段巡らされ、その間に波状文と粗雑

な列点文が施される。波状文帯も中ほどには櫛がしっかりと当たらず施文できていない。なお、透孔は凹線と波状文の施文の後に穿たれている。脚部は端部を中心に焼き歪みが大きい。蓋・台付壺とも色調は灰色で、焼成良好だが、台付壺の脚部にはやや焼きが甘い箇所がある。胎土は密で、径1mm以下の白色砂粒をまばらに含む。蓋の子壺部口縁端部内面や、台付壺の脚端部内面を中心に鉄錆が付着している。

37-1・2の鳥鈕蓋付台付壺と壺付蓋付台付壺、それぞれの台付壺は類似している。壺付蓋付台付壺は蓋を乗せた形で出土しており、鳥鈕蓋付台付壺は蓋がはずれた状態だったが、壺付蓋付台付壺とは離れた位置で出土しており、セットとして報告されてきたものである。今回の調査でも特に双方のセット関係、すなわち蓋が互い違いになっていると疑われるような観察所見は無かったことを付記しておく。

石室外出土の須恵器 石室外出土の須恵器には高杯、蓋杯、壺の破片がある（第38図）。38-1・2は高杯と考えられる破片であり、いずれも「3T-10cm」と書かれた袋の中に収められており、3トレンチの出土品である。38-1は高杯の杯部と考えられ、外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにより仕上げられる。色調は灰色で、焼成良好である。



第38図 石室外出土須恵器

胎土は密で、砂粒をほとんど含まない。38-2は高杯脚部で、長脚二段三方透孔と推定される。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、上下の透孔の間には二重凹線が施される。色調は暗灰色で、焼成は良好である。胎土は密で、砂粒をほとんど含まない。

38-3～5については実見できなかったため、「寺西第一号墳発掘調査概報」（歌川学1966）を参考に記述する。38-3～5は南側葺石付近から出土したものである。38-3・4は合子形の蓋杯の身である。双方とも類似した形態をしており、口縁部はやや内湾気味に内傾して端部に至る。38-3は口縁端部が丸く、38-4は口縁端部内面が面取りされるか段になっているようである。38-5は罎（壺）の口縁部として報告されているもので、未実見のため断言を控えるが、提瓶や甕の口縁部や高杯の脚部の可能性もあると考えられる。

以上報告した須恵器については、実見できなかった38-3～5を除くと、石室内、石室外とも全体に摩滅などの顕著な使用感を確認できなかった。提瓶の耳にも顕著な擦れ等は認められなかった。

土師器・埴輪 最後に、須恵器ではないが土器として土師器の高杯片（38-6）、円筒埴輪片（38-7）が出土している。こちらも実見できなかったが、「寺西第一号墳発掘調査概報」（歌川学1966）によると、土師器高杯は東側柱状立石の南2m、表土の80cm下から出土したとされる。円筒埴輪片は石室内の上部、蓋石の下面より約20cm下（石室床面から1.8m上）から出土し、墳頂付近にあったものが流れ込んだと想定されている。

その他の遺物と同様に、須恵器等も所蔵が分かれている。須恵器の提瓶31-2及び石室外出土の須恵器高杯38-1・2は愛知大学（総合郷土研究所）、そのほかはすべて豊橋市である。

（大西 遼）

『愛大史学』第32号別冊として、「豊橋市寺西1号墳の研究(1)」をお届けします。分量が非常に多くなってしまったため、本冊には前半部だけを収録することとし、後半部は『豊橋市寺西1号墳の研究(2)』として、別途愛知大学総合郷土研究所から刊行することになりました。ともに愛知大学リポジトリ (<https://aichiu.repo.nii.ac.jp/>) にて公開を予定しておりますので、お手数ですが後半部も入手していただきますようお願いいたします(廣瀬)。

豊橋市寺西1号墳の研究(1)

報告編

—愛大史学第32号別冊—

発行日	2023年3月31日
編集・発行	愛知大学文学部歴史地理学科 愛知県豊橋市町畑町1-1
印刷	共和印刷株式会社

